

# 乙金窯跡・東浦窯跡群・大谷窯跡群

大野城市文化財調査報告書 第188集

2021

大野城市教育委員会

乙金窯跡・東浦窯跡群・大谷窯跡群

大野城市文化財調査報告書 第188集

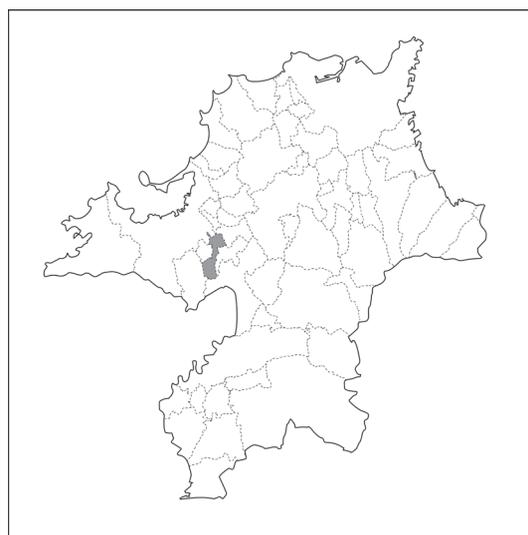
大野城市教育委員会



おとがなかまあと ひがしうらかまあとぐん おおたにかまあとぐん

# 乙金窯跡・東浦窯跡群・大谷窯跡群

大野城市文化財調査報告書 第188集



2021

大野城市教育委員会



# 序

福岡県大野城市は福岡平野南部に位置し、西暦 665 年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城跡」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた街です。市域は南北に長い形をしており、大野城跡・水城跡・牛頸須恵器窯跡の国指定史跡をはじめ、多くの歴史遺産があります。

本書で報告する「乙金窯跡」・「東浦窯跡群」・「大谷窯跡群」は、昭和 43（1968）年から昭和 44（1969）年にかけて、国士舘大学・大川清教授により発掘調査が行われたものです。本市における最初期の発掘調査という意味でも大変意義深いものがあります。これらの資料については、大野町が発行した「大野町の文化財 1」および「大野町の文化財 2」でその概要が報告されていましたが、正式な報告書は未刊行のままでした。この度、関係各位のご助力により報告書が刊行された次第です。3つの窯跡群の整理作業を通じて、様々な知見を得ることができましたが、中でも大谷窯跡群では国内最初期の瓦や硯を生産していたことが明らかになり、牛頸窯跡群の特質を語る上で非常に重要な資料となります。

遺跡は土地に刻まれた歴史であり、我々に多くのことを教えてくれます。こうした遺跡を記録し、報告書というかたちで広く一般に公開するとともに、後世へと伝えていけるよう努めています。本書が文化財の理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究や教育の面で広く活用していただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査ならびに報告書作成にあたり多大なるご理解、ご協力いただきました関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

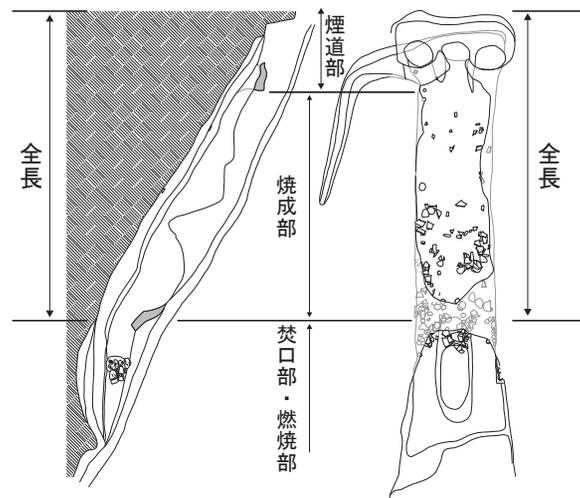
令和 3 年 3 月 31 日

大野城市教育委員会  
教育長 吉富 修

# 例 言

1. 本書は、宅地開発に伴い国土館大学（代表：大川清教授）が発掘調査を実施した「乙金窯跡」・「東浦窯跡群」・「大谷窯跡群」の報告書である。
2. 整理作業・報告書作成は、大野城市教育委員会が実施した。
3. 遺構写真は、国土館大学調査参加者が担当した。
4. 遺構実測は、国土館大学調査参加者が実施した。なお、地形測量図のコンタは1 m間隔で、絶対高が不明であるため相対的な比高差で示す。
5. 遺構実測図中の方位は磁北である。
6. 遺物実測・拓本・製図、遺構図の製図は株島田組に委託し、遺物実測の一部は上田龍児が実施した。なお、実測図・製図の点検は澤田康夫・上田が行った。
7. 遺物写真撮影は、牛嶋茂（写測エンジニアリング株）が担当した。
8. 遺物観察表は、株島田組が作成し、上田が点検した。
9. 本書に掲載した遺跡分布図は、大野城市が発行した『牛頸窯跡群—総括報告書Ⅰ—』を一部改変（原図は国土地理院発行の1 / 50,000 地形図『福岡南部』・『太宰府』）して使用した。
10. 遺物の名称のうち、須恵器蓋杯については平城京分類による呼称を用いる。
11. 窯跡の各部位の名称や法量は、凡例のとおりである。
12. 本書に掲載した資料は、すべて大野城市教育委員会が管理・保管している。
13. 本書に使用する遺物の土色名は、『新版標準土色帖』農林水産省技術会議事務局監修を使用している。
14. 本書の執筆は、Ⅰ章・Ⅱ章・Ⅵ章1・2・3を上田が担当し、Ⅲ章・Ⅳ章・Ⅴ章・Ⅵ章4を園井正隆（株島田組）が執筆したものを上田が点検、加筆・修正した。編集は上田監修のもと、株島田組が行った。

15. 報告書作成に関しては、次の方々のご協力を得た。（敬省略・五十音順）  
牛嶋茂・小川泰樹・小田和利  
小田富士雄・小田裕樹・亀田修一  
白井克也・松尾奈緒子・森隆  
森井千賀子・吉田佳広



【凡例】窯跡の各部位の名称と法量

※被熱の範囲などが不明であるため、床面の傾斜変換点から煙道部上端までを全長と表現する。

# 本文目次

I. はじめに	
1. 報告書刊行に至る経緯	1
2. 発掘調査の期間と契機	1
3. 調査体制	2
II. 位置と環境	
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
III. 乙金窯跡	
1. 調査の概要	9
2. 1号窯跡	13
3. 2号窯跡	17
4. 出土地点不明遺物	24
IV. 東浦窯跡群	
1. 調査の概要	25
2. 1号窯跡	25
3. 2号窯跡	36
4. 3号窯跡	42
5. 出土地点不明遺物	47
V. 大谷窯跡群	
1. 調査の概要	49
2. 1号窯跡	51
3. 2号窯跡	71
4. 3号窯跡	98
5. 4号窯跡	104
6. トレンチ、その他の出土遺物	111
VI. 総括	
1. 各窯跡の構造と操業時期	131
2. 大谷窯跡群出土の獣脚硯	133
3. 牛頸窯跡群の朝鮮半島系資料について	137
4. ヘラ記号について	143

## 插图目次

第1图	遺跡分布図(1 / 62,500)	5 ~ 6
第2图	乙金窯跡調査地点位置図(1 / 7,500)	9
第3图	乙金窯跡遺構配置図(1 / 400)	10
第4图	乙金窯跡1号窯跡実測図(1 / 60)	11 ~ 12
第5图	1号窯跡出土遺物実測図①(1 / 3)	14
第6图	1号窯跡出土遺物実測図②(1 / 3)	15
第7图	1号窯跡出土遺物実測図③(1 / 3)	16
第8图	2号窯跡出土遺物実測図①(1 / 3)	18
第9图	乙金窯跡2号窯跡実測図(1 / 60)	19 ~ 20
第10图	2号窯跡出土遺物実測図②(1 / 3)	21
第11图	2号窯跡出土遺物実測図③(1 / 3)	22
第12图	2号窯跡出土遺物実測図④(1 / 3)	23
第13图	乙金窯跡出土地点不明遺物実測図(1 / 3)	24
第14图	東浦窯跡群調査地点位置図(1 / 7,500)	25
第15图	東浦窯跡群遺構配置図(1 / 500)	26
第16图	東浦窯跡群1号窯跡実測図(1 / 60)	27 ~ 28
第17图	1号窯跡出土遺物実測図①(1 / 3)	30
第18图	1号窯跡出土遺物実測図②(1 / 3)	31
第19图	1号窯跡出土遺物実測図③(1 / 3・1 / 4)	32
第20图	1号窯跡出土遺物実測図④(1 / 3)	33
第21图	1号窯跡出土遺物実測図⑤(1 / 3)	34
第22图	1号窯跡出土遺物実測図⑥(1 / 3)	35
第23图	東浦窯跡群2号窯跡実測図(1 / 80)	37 ~ 38
第24图	2号窯跡出土遺物実測図①(1 / 3)	39
第25图	2号窯跡出土遺物実測図②(1 / 3)	40
第26图	2号窯跡出土遺物実測図③(1 / 3・1 / 6)	41
第27图	東浦窯跡群3号窯跡実測図(1 / 60)	43 ~ 44
第28图	3号窯跡出土遺物実測図①(1 / 3)	45
第29图	3号窯跡出土遺物実測図②(1 / 3)	46
第30图	東浦窯跡群出土地点不明遺物実測図①(1 / 3)	47
第31图	東浦窯跡群出土地点不明遺物実測図②(1 / 3・1 / 4)	48
第32图	大谷窯跡群調査地点位置図(1 / 7,500)	49
第33图	大谷窯跡群遺構配置図(1 / 400)	50

第 34 図	大谷窯跡群 1 号窯跡実測図① (1 / 60)	53 ~ 54
第 35 図	大谷窯跡群 1 号窯跡実測図② (1 / 60)	55 ~ 56
第 36 図	1 号窯跡出土遺物実測図① (1 / 3)	57
第 37 図	1 号窯跡出土遺物実測図② (1 / 3)	58
第 38 図	1 号窯跡出土遺物実測図③ (1 / 4)	59
第 39 図	1 号窯跡出土遺物実測図④ (1 / 4)	60
第 40 図	1 号窯跡出土遺物実測図⑤ (1 / 4)	61
第 41 図	1 号窯跡出土遺物実測図⑥ (1 / 3)	62
第 42 図	1 号窯跡出土遺物実測図⑦ (1 / 3)	63
第 43 図	1 号窯跡出土遺物実測図⑧ (1 / 4)	64
第 44 図	1 号窯跡出土遺物実測図⑨ (1 / 4)	65
第 45 図	1 号窯跡出土遺物実測図⑩ (1 / 3・1 / 4)	66
第 46 図	1 号窯跡出土遺物実測図⑪ (1 / 3)	67
第 47 図	1 号窯跡出土遺物実測図⑫ (1 / 3)	68
第 48 図	1 号窯跡出土遺物実測図⑬ (1 / 4)	69
第 49 図	1 号窯跡出土遺物実測図⑭ (1 / 4)	70
第 50 図	大谷窯跡群 2 号窯跡灰原土層実測図 (1 / 60)	71
第 51 図	2 号窯跡出土遺物実測図① (1 / 3)	72
第 52 図	2 号窯跡出土遺物実測図② (1 / 3)	73
第 53 図	2 号窯跡出土遺物実測図③ (1 / 3)	74
第 54 図	2 号窯跡出土遺物実測図④ (1 / 3)	75
第 55 図	2 号窯跡出土遺物実測図⑤ (1 / 3)	76
第 56 図	2 号窯跡出土遺物実測図⑥ (1 / 3)	77
第 57 図	2 号窯跡出土遺物実測図⑦ (1 / 3)	78
第 58 図	2 号窯跡出土遺物実測図⑧ (1 / 3)	79
第 59 図	2 号窯跡出土遺物実測図⑨ (1 / 4)	80
第 60 図	2 号窯跡出土遺物実測図⑩ (1 / 3)	81
第 61 図	2 号窯跡出土遺物実測図⑪ (1 / 3)	82
第 62 図	2 号窯跡出土遺物実測図⑫ (1 / 3)	83
第 63 図	2 号窯跡出土遺物実測図⑬ (1 / 3)	84
第 64 図	2 号窯跡出土遺物実測図⑭ (1 / 3)	85
第 65 図	2 号窯跡出土遺物実測図⑮ (1 / 3)	86
第 66 図	2 号窯跡出土遺物実測図⑯ (1 / 3)	87
第 67 図	2 号窯跡出土遺物実測図⑰ (1 / 3)	88
第 68 図	2 号窯跡出土遺物実測図⑱ (1 / 3・1 / 4)	89

第 69 図	2号窯跡出土遺物実測図⑱ (1 / 3)	90
第 70 図	2号窯跡出土遺物実測図⑳ (1 / 4)	91
第 71 図	2号窯跡出土遺物実測図㉑ (1 / 4)	92
第 72 図	2号窯跡出土遺物実測図㉒ (1 / 4)	93
第 73 図	2号窯跡出土遺物実測図㉓ (1 / 3)	94
第 74 図	2号窯跡出土遺物実測図㉔ (1 / 3)	95
第 75 図	2号窯跡出土遺物実測図㉕ (1 / 3・1 / 4)	96
第 76 図	2号窯跡出土遺物実測図㉖ (1 / 3・1 / 4)	97
第 77 図	大谷窯跡群 3号窯跡実測図 (1 / 60)	99 ~ 100
第 78 図	3号窯跡出土遺物実測図① (1 / 3)	101
第 79 図	3号窯跡出土遺物実測図② (1 / 3)	102
第 80 図	3号窯跡出土遺物実測図③ (1 / 3)	103
第 81 図	大谷窯跡群 4号窯跡実測図 (1 / 60)	104
第 82 図	4号窯跡出土遺物実測図① (1 / 3)	105
第 83 図	4号窯跡出土遺物実測図② (1 / 3)	106
第 84 図	4号窯跡出土遺物実測図③ (1 / 3)	107
第 85 図	4号窯跡出土遺物実測図④ (1 / 3・1 / 4)	108
第 86 図	4号窯跡出土遺物実測図⑤ (1 / 3・1 / 4)	109
第 87 図	0・1・2トレンチ出土遺物実測図 (1 / 3)	112
第 88 図	3・4トレンチ出土遺物実測図 (1 / 3)	113
第 89 図	5トレンチ出土遺物実測図 (1 / 3)	114
第 90 図	3区1・2号灰原出土遺物実測図 (1 / 3)	115
第 91 図	3区灰原出土遺物実測図① (1 / 3)	116
第 92 図	3区灰原出土遺物実測図② (1 / 3)	117
第 93 図	3区灰原出土遺物実測図③ (1 / 3)	118
第 94 図	3区灰原出土遺物実測図④ (1 / 3)	119
第 95 図	3区道路断面灰原・3区出土遺物実測図 (1 / 3)	120
第 96 図	大谷窯跡群出土地点不明遺物実測図① (1 / 3)	121
第 97 図	大谷窯跡群出土地点不明遺物実測図② (1 / 3)	122
第 98 図	大谷窯跡群出土地点不明遺物実測図③ (1 / 3)	123
第 99 図	大谷窯跡群出土地点不明遺物実測図④ (1 / 3・1 / 4)	124
第 100 図	大谷窯跡群出土地点不明遺物実測図⑤ (1 / 3)	125
第 101 図	大谷窯跡群出土地点不明遺物実測図⑥ (1 / 3)	126
第 102 図	大谷窯跡群出土地点不明遺物実測図⑦ (1 / 4)	127
第 103 図	大谷窯跡群出土地点不明遺物実測図⑧ (1 / 4)	128

第 104 図	大谷窯跡群出土地点不明遺物実測図⑨・ 月ノ浦窯跡出土遺物実測図 (1 / 3・1 / 4) ……	129
第 105 図	北部九州出土の獣脚硯 (1 / 3) ……	135
第 106 図	牛頸窯跡群の朝鮮半島系資料 (1 / 6・1 / 8・1 / 10・1 / 12 ) ……	141

## 表 目 次

表 1	ヘラ記号を有する須恵器蓋杯の出土数一覧表……………	143
表 2	乙金窯跡、東浦窯跡群、大谷窯跡群におけるヘラ記号一覧表……………	144
表 3	乙金窯跡、東浦窯跡群、大谷窯跡群のヘラ記号使用時期一覧表……………	146
表 4	Ⅲ期操業窯のヘラ記号を有する蓋杯の出土数一覧表……………	147
表 5	ヘラ記号のデザイン変遷表……………	147
表 6	ヘラ記号の画数における使用比率一覧表……………	148
表 7	乙金窯跡出土遺物観察表……………	149
表 8	東浦窯跡群出土遺物観察表……………	151
表 9	大谷窯跡群出土遺物観察表……………	155

## 図 版 目 次

図版 1	( 1 ) 乙金窯跡遠景① ( 3 ) 乙金窯跡調査風景 ( 南から )	( 2 ) 乙金窯跡遠景②
図版 2	( 1 ) 乙金窯跡 1・2 号窯跡全景① ( 南西から ) ( 2 ) 乙金窯跡 1・2 号窯跡全景② ( 南西から ) ( 3 ) 乙金窯跡 1・2 号窯跡全景③ ( 西から )	
図版 3	( 1 ) 乙金窯跡 1 号窯跡全景① ( 西から ) ( 3 ) 乙金窯跡 1 号窯跡全景③ ( 北東から ) ( 4 ) 乙金窯跡 1 号窯跡天井部検出状況 ( 西から )	( 2 ) 乙金窯跡 1 号窯跡全景② ( 南西から )
図版 4	( 1 ) 乙金窯跡 2 号窯跡全景① ( 南から ) ( 3 ) 乙金窯跡 2 号窯跡全景③ ( 北東から )	( 2 ) 乙金窯跡 2 号窯跡全景② ( 南西から ) ( 4 ) 乙金窯跡 2 号窯跡煙道部 ( 北東から )
図版 5	( 1 ) 東浦窯跡群遠景① ( 3 ) 東浦窯跡群 1 号窯跡遠景 ( 南西から )	( 2 ) 東浦窯跡群遠景②
図版 6	( 1 ) 東浦窯跡群 1 号窯跡全景 ( 南西から ) ( 2 ) 東浦窯跡群 1 号窯跡燃焼部付近天井部遺存状況① ( 東から ) ( 3 ) 東浦窯跡群 1 号窯跡燃焼部付近天井部遺存状況② ( 南から )	

- 図版 7 (1) 東浦窯跡群 1 号窯跡煙道部①(北から)  
(2) 東浦窯跡群 1 号窯跡煙道部②(南から)  
(3) 東浦窯跡群 1 号窯跡煙道部③(北から)
- 図版 8 (1) 東浦窯跡群 1 号窯跡焚口部遺物出土状況  
(2) 東浦窯跡群 1 号窯跡焼台と遺物出土状況①  
(3) 東浦窯跡群 1 号窯跡焼台と遺物出土状況②
- 図版 9 (1) 東浦窯跡群 2 号窯跡全景①(南から) (2) 東浦窯跡群 2 号窯跡全景②(南から)  
(3) 東浦窯跡群 2 号窯跡燃烧部付近天井部残存状況(南から)
- 図版 10 (1) 東浦窯跡群 2 号窯跡右側壁(北西から)  
(2) 東浦窯跡群 2 号窯跡左側壁(南西から)  
(3) 東浦窯跡群 2 号窯跡全景①(南西から) (4) 東浦窯跡群 2 号窯跡全景②(北東から)
- 図版 11 (1) 東浦窯跡群 2 号窯跡焼成部遺物出土状況(西から)  
(2) 東浦窯跡群 2 号窯跡煙道部①(南西から) (3) 東浦窯跡群 2 号窯跡煙道部②(南から)
- 図版 12 (1) 東浦窯跡群 2 号窯跡煙道部③(南から) (2) 東浦窯跡群 2 号窯跡煙道部④(北から)  
(3) 東浦窯跡群 2 号窯跡煙道部⑤(北東から)
- 図版 13 (1) 東浦窯跡群 2 号窯跡右側壁石組(北から)  
(2) 東浦窯跡群 2 号窯跡右側壁指頭痕(北から)  
(3) 東浦窯跡群 2 号窯跡焼成部遺物出土状況①(南から)
- 図版 14 (1) 東浦窯跡群 2 号窯跡焼成部遺物出土状況②(南から)  
(2) 東浦窯跡群 2 号窯跡焼成部遺物出土状況③(南西から)  
(3) 東浦窯跡群 2 号窯跡鉄鏟出土状況(西から)
- 図版 15 (1) 東浦窯跡群 3 号窯跡全景①(南から) (2) 東浦窯跡群 3 号窯跡全景②(南西から)  
(3) 東浦窯跡群 3 号窯跡燃烧部付近遺物出土状況(南西から)
- 図版 16 (1) 東浦窯跡群 3 号窯跡左側壁付近支柱検出状況①  
(2) 東浦窯跡群 3 号窯跡左側壁付近支柱検出状況②  
(3) 東浦窯跡群 3 号窯跡左側壁付近支柱検出状況③(南西から)
- 図版 17 (1) 東浦窯跡群 3 号窯跡右側壁付近支柱検出状況①(西から)  
(2) 東浦窯跡群 3 号窯跡右側壁付近支柱検出状況②(南西から)  
(3) 東浦窯跡群 3 号窯跡右側壁付近支柱検出状況③(東から)
- 図版 18 (1) 東浦窯跡群 3 号窯跡焼成部遺物出土状況①(南西から)  
(2) 東浦窯跡群 3 号窯跡焼成部遺物出土状況②  
(3) 東浦窯跡群 3 号窯跡焼成部遺物出土状況③
- 図版 19 (1) 東浦窯跡群 3 号窯跡焼成部遺物出土状況④  
(2) 東浦窯跡群 3 号窯跡燃烧部付近横断土層(南西から)  
(3) 東浦窯跡群 3 号窯跡燃烧部付近縦断土層

- 図版 20 ( 1 ) 東浦窯跡群調査風景 ( 1 号窯跡煙道部 ) ( 2 ) 大野町役場町長来訪時の様子  
( 3 ) 九州大学 ( 当時 ) 小田富士雄氏・石山勲氏来訪時の記念写真
- 図版 21 ( 1 ) 大谷窯跡群遠景① ( 2 ) 大谷窯跡群遠景②  
( 3 ) 大谷窯跡群遠景③
- 図版 22 ( 1 ) 大谷窯跡群調査風景① ( 北西から ) ( 2 ) 大谷窯跡群調査風景② ( 北西から )  
( 3 ) 大谷窯跡群 1・2 号窯跡遠景 ( 西から )
- 図版 23 ( 1 ) 大谷窯跡群 1 号窯跡全景① ( 北西から ) ( 2 ) 大谷窯跡群 1 号窯跡全景② ( 北西から )  
( 3 ) 大谷窯跡群 1 号窯跡窯尻部 ( 北西から )
- 図版 24 ( 1 ) 大谷窯跡群 1 号窯跡煙道部 ( 北西から )  
( 2 ) 大谷窯跡群 1 号窯跡天井部残存状況① ( 北西から )  
( 3 ) 大谷窯跡群 1 号窯跡天井部残存状況② ( 北西から )
- 図版 25 ( 1 ) 大谷窯跡群 1 号窯跡焼成部遺物出土状況 ( 北西から )  
( 2 ) 大谷窯跡群 1 号窯跡煙道部 ( 南西から ) ( 3 ) 大谷窯跡群 1 号窯跡溝 ( 西から )
- 図版 26 ( 1 ) 大谷窯跡群 2 号窯跡全景① ( 北西から ) ( 2 ) 大谷窯跡群 2 号窯跡全景② ( 北西から )  
( 3 ) 大谷窯跡群 2 号窯跡焼成部遺物出土状況 ( 北西から )
- 図版 27 ( 1 ) 大谷窯跡群 2 号窯跡窯尻部① ( 北西から )  
( 2 ) 大谷窯跡群 2 号窯跡窯尻部② ( 北西から )  
( 3 ) 大谷窯跡群 2 号窯跡溝 ( 南から )
- 図版 28 ( 1 ) 大谷窯跡群 2 号窯跡窯尻部遺物出土状況 ( 東から )  
( 2 ) 大谷窯跡群 2 号窯跡焼成部遺物出土状況① ( 西から )  
( 3 ) 大谷窯跡群 2 号窯跡焼成部遺物出土状況② ( 西から )
- 図版 29 ( 1 ) 大谷窯跡群 3 号・4 号窯跡遠景① ( 西から )  
( 2 ) 大谷窯跡群 3 号・4 号窯跡遠景② ( 北西から )  
( 3 ) 大谷窯跡群 3 号窯跡焚口部・燃焼部 ( 北西から )
- 図版 30 ( 1 ) 大谷窯跡群 3 号窯跡焚口部・燃焼部石組① ( 北から )  
( 2 ) 大谷窯跡群 3 号窯跡焚口部・燃焼部石組② ( 北から )  
( 3 ) 大谷窯跡群 3 号窯跡焚口部・燃焼部石組③ ( 北西から )
- 図版 31 ( 1 ) 大谷窯跡群 3 号窯跡煙道部① ( 東から )  
( 2 ) 大谷窯跡群 3 号窯跡煙道部② ( 東から )  
( 3 ) 大谷窯跡群 3 号窯跡煙道部③ ( 北西から )
- 図版 32 ( 1 ) 大谷窯跡群 4 号窯跡全景① ( 北西から )  
( 2 ) 大谷窯跡群 4 号窯跡全景② ( 北西から )  
( 3 ) 大谷窯跡群発掘調査参加者集合写真
- 図版 33 ( 1 ) 乙金窯跡 2 号窯跡出土遺物集合 ( 2 ) 東浦窯跡群 1 号窯跡出土遺物集合
- 図版 34 ( 1 ) 東浦窯跡群 2 号窯跡出土遺物集合 ( 2 ) 東浦窯跡群 3 号窯跡出土遺物集合

- 図版 35 ( 1 ) 大谷窯跡群 1 号窯跡出土遺物集合 ( 2 ) 大谷窯跡群 1 号窯跡出土瓦集合
- 図版 36 ( 1 ) 大谷窯跡群 1 号窯跡被熱変形蓋杯集合 ( 2 ) 大谷窯跡群 2 号窯跡出土遺物集合
- 図版 37 ( 1 ) 大谷窯跡群 2 号窯跡出土窯道具集合  
( 2 ) 大谷窯跡群 2 号窯跡出土ヘラ記号記載蓋杯集合
- 図版 38 乙金窯跡出土遺物①
- 図版 39 ( 1 ) 乙金窯跡出土遺物② ( 2 ) 東浦窯跡群出土遺物①
- 図版 40 東浦窯跡群出土遺物②
- 図版 41 東浦窯跡群出土遺物③
- 図版 42 ( 1 ) 東浦窯跡群出土遺物④ ( 2 ) 大谷窯跡群出土遺物①
- 図版 43 大谷窯跡群出土遺物②
- 図版 44 大谷窯跡群出土遺物③
- 図版 45 大谷窯跡群出土遺物④
- 図版 46 大谷窯跡群出土遺物⑤
- 図版 47 大谷窯跡群出土遺物⑥
- 図版 48 大谷窯跡群出土遺物⑦
- 図版 49 大谷窯跡群出土遺物⑧
- 図版 50 大谷窯跡群出土遺物⑨
- 図版 51 大谷窯跡群出土遺物⑩
- 図版 52 大谷窯跡群出土遺物⑪
- 図版 53 大谷窯跡群出土遺物⑫
- 図版 54 大谷窯跡群出土遺物⑬
- 図版 55 大谷窯跡群出土遺物⑭
- 図版 56 大谷窯跡群出土遺物⑮
- 図版 57 大谷窯跡群出土遺物⑯
- 図版 58 大谷窯跡群出土遺物⑰
- 図版 59 大谷窯跡群出土遺物⑱
- 図版 60 大谷窯跡群出土遺物⑲
- 図版 61 大谷窯跡群出土遺物⑳
- 図版 62 大谷窯跡群出土遺物㉑
- 図版 63 大谷窯跡群出土遺物㉒
- 図版 64 大谷窯跡群出土遺物㉓
- 図版 65 大谷窯跡群出土遺物㉔
- 図版 66 大谷窯跡群出土遺物㉕
- 図版 67 大谷窯跡群出土遺物㉖
- 図版 68 大谷窯跡群出土遺物㉗

# I. はじめに

## 1. 報告書刊行に至る経緯

本書に収録する乙金窯跡・東浦窯跡群・大谷窯跡群は、昭和43～44（1968～1969）年にかけて国士舘大学大川清氏により発掘調査が行われた。その概要は、「大野町の文化財1」（1970 大野町教育委員会）、「大野町の文化財2」（1971 大野町教育委員会）に紹介されている。

その後、調査を担当された大川氏は、栃木県に日本窯業史研究所（以下、「研究所」）を設立し、出土遺物や記録類を研究所に移された。その間、国士舘大学もしくは研究所において記録類の整理や出土遺物の整理が進められていたようであるが、報告書刊行には至らなかった。

平成10（1998）年、本市において市史編さん委員会が発足し、平成17（2005）年に『大野城市史通史編（上巻）』を刊行した。当時の文化財担当者であった舟山良一は、市史編さん事業の中で大谷窯跡群の概要報告を企画した。舟山は大川氏に大谷窯跡群の概要報告の執筆を依頼すべく、研究所を訪ねたところ、快諾されたとのことである。ただ、時間の都合上、市史編さん事業の中での概要報告は実現しなかった。

平成18～19（2006～2007）年には牛頸窯跡群の国史跡指定を目指して『牛頸窯跡群—総括報告書Ⅰ—』（以下、「総括報告書」）刊行事業が進められた。執筆・編集を担当した舟山は、総括報告書作成にあたり、再度、大谷窯跡群の調査成果を報告すべく、研究所と協議を進めた。その結果、大谷窯跡群をはじめ、乙金窯跡・東浦窯跡群の遺物・写真・図面などが、本市へと返還される運びとなった。しかし、資料の量が膨大であることに加え、総括報告書作成当時は市内で大規模開発に伴う発掘調査や報告書刊行事業を進めていたこともあり、総括報告書の中でも詳細な報告はかなわなかった。この間の経緯については、総括報告書「付. 大谷窯跡群について」で触れられている。

こうした経緯の中、本市では平成18（2006）年度から過年度分の発掘調査報告書の刊行を進めていたが、大規模開発が落ち着いたこともあり、令和2（2020）年度に整理作業・報告書刊行を行うこととなった。

## 2. 発掘調査の期間と契機

当時の記録類は現場で作成した実測図や写真などしか残っておらず、発掘調査の契機や経過を知る手がかりは少ない。以下では、当時の記録類をはじめ「大野町の文化財1・2」の概要や、関連する報告書などからそれぞれの遺跡ごとに調査の期間と契機を記すこととする。

### 【乙金窯跡】

調査期間：昭和44（1969）年1月

平成24年に大野城市教育委員会が実施した「善一田遺跡第1次調査」では、大川氏によって調査された窯跡が削平された状態を確認した。詳細は『乙金地区遺跡群22』（大野城市文化財調査報告書第158集）を参照されたい。

調査契機：直接の契機や事業主体は不明である。昭和44年調査時には旧地形が良く残っていたが、平成24年調査時には丘陵頂部が大きく造成され平坦面を形成し、窯の直近まで宅地が迫る状況で

あった。したがって、宅地造成に先立つ調査であったことが推察される。

#### 【東浦窯跡群】

調査期間：昭和 43（1968）年 12 月～ 44（1969）年 1 月

調査契機：南ヶ丘団地造成の際に発見された。「野添・大浦窯跡」報告書の中では、住宅団地造成工事に伴い西日本鉄道株式会社主催により実施されたことが記されている。

#### 【大谷窯跡群】

調査期間：昭和 43（1968）年 12 月

大谷窯跡群の実測図には、「1971 年 3 月」の注記があるが、昭和 46 年 3 月刊行の「大野町の文化財 2」には製図した全体図が掲載されていることから、「1971 年」の記述は整理作業の際の注記と解釈した。総括報告書の記述にしたがって調査期間を上記のとおりとする。

調査契機：東浦窯跡群と同様に、西日本鉄道株式会社による造成工事を契機とする。総括報告書の中には、福岡県教育委員会の依頼をうけて国土館大学大川氏により調査されたことが記されている。

### 3. 調査体制

#### 【昭和 43・44 年度（発掘調査）】

発掘調査の参加者については、全容を把握しうる資料がないため、実測図や写真に記された記録に基づき参加者について列挙する。

国土館大学 教授 大川清

調査参加者 井、石川、板橋、伊藤博幸、狐塚、近藤、高橋章、戸田、福田恭子、眞下高幸、松田政基、森廣樹、山崎由美子（五十音順、整理作業参加者を含む可能性あり）

#### 【令和 2 年度（整理作業）】

大野城市教育委員会教育長 吉富修

教育部長 日野和弘

ふるさと文化財課長 石木秀啓

啓発・整備担当係長 林潤也

発掘調査担当係長 上田龍児

主査 徳本洋一

主任主事 秋穂敏明

主事 鮫島由佳

技師 山元瞭平、齋藤明日香

会計年度任用職員 澤田康夫、木原堯、山村智子、深町美佳、西村友美、三好りさ

整理作業員 小畑貴子、古賀栄子、小嶋のり子、篠田千恵子、白井典子、

津田りえ、仲村美幸、氷室優、松本友里恵

## Ⅱ．位置と環境

### 1．地理的環境

大野城市が位置する福岡平野は、南を背振山地、東を三郡山地に挟まれ、北は博多湾に面している。平野中央部を那珂川・御笠川が貫流し、広大な沖積平野を形成する。大野城市は福岡平野南東の最奥部に位置し、最も平野が狭くなる地峡部にあたる。古代以来この地峡部は交通の要衝で、現在でも九州縦貫自動車道・JR鹿児島本線・西鉄天神大牟田線・国道3号など九州の南北を結ぶ幹線道が走っている。市域の東側は月隈丘陵に連なる乙金山・四王寺山、南側は牛頸山に挟まれ、その中央を御笠川が貫流する。山地は早良花崗岩からなり、風化が著しく真砂土となっており、山麓部から平地丘陵部にかけて段丘が発達する。高位段丘は開析がすすみ、中位段丘は平坦部も多く、平野部では沖積地が広がる。

### 2．歴史的環境

**旧石器時代** 市域北東部の松葉園遺跡、薬師の森遺跡、原口遺跡、雉子ヶ尾遺跡、釜蓋原遺跡や市域南部の出口遺跡、横峰遺跡、本堂遺跡など丘陵上の遺跡でナイフ形石器・細石刃が確認される。周辺では南八幡遺跡、諸岡遺跡、井尻B遺跡、門田遺跡などで後期旧石器時代の遺物が分布する。

**縄文時代** 市域で草創期の遺構・遺物は確認されていないが、周辺では門田遺跡で爪形文土器が出土している。早期になると遺跡の数が増加し、市域北東部の善一田遺跡、古野遺跡、薬師の森遺跡、雉子ヶ尾遺跡、釜蓋原遺跡や市域南部の本堂遺跡といった丘陵地で押型文土器や石器が出土するほか、石勺遺跡などの平野微高地上にも遺跡が分布する。前期から中期の遺跡は市域では確認されておらず、周辺でも遺跡の数が減少する。後・晩期の遺跡として牛頸塚原遺跡・日ノ浦遺跡で後期後半から晩期の住居などが確認されるほか、善一田遺跡、古野遺跡、原口遺跡、薬師の森遺跡で後・晩期の遺物が分布する。なお、薬師の森遺跡や石勺遺跡では落とし穴状遺構を確認しており、これらは縄文時代の所産である可能性が高い。

**弥生時代** 弥生時代には福岡平野全域で遺跡が増加し、沖積地にも遺跡が広がる。市域では北部から中央部の丘陵・平野部に遺跡が多い。

**【前期】** 川原遺跡や薬師の森遺跡で板付I式期にさかのぼる集落がある。墳墓は御陵前ノ椽遺跡（前期中頃）、中・寺尾遺跡（前期中頃から中期）、塚口遺跡（前期後半から末）で甕棺墓・土坑墓・木棺墓などが営まれる。南部では牛頸日ノ浦遺跡で前期後半の甕棺墓・土坑墓がある。また御陵遺跡では前期中頃から末の集落が確認されている。前期末頃には仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡など平野部で集落の数が増加し、これらの多くは中期へと続く。なお、周辺地域では板付遺跡や那珂遺跡で早・前期の環濠集落が成立し拠点集落となる。

**【中期】** 市域では平野部の仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡が前期末から中期を通して継続する集落である。丘陵地でも北部の中・寺尾遺跡、森園遺跡で中期前半から後半に集落が営まれ、南部でも本堂遺跡で小規模な集落がある。墳墓遺跡は前期から継続する中・寺尾遺跡や、森園遺跡で中期後半を中心にした甕棺墓群があるほか、平野部の石勺遺跡や瑞穂遺跡で甕棺墓を主体とする墳墓

がある。周辺では春日丘陵に大規模な集落・墳墓が出現し、青銅器生産も開始される。特に須玖岡本遺跡D地点甕棺は約30面の前漢鏡・ガラス璧・多数の青銅器を副葬し「王墓」と称される。

【後期】 中期以来の集落である仲島遺跡、石勺遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡、本堂遺跡などが存続するほか、村下遺跡、榎町遺跡で新たな集落が出現する。仲島遺跡では貨布・銅鏡片や青銅器鋳型などが出土しており拠点的な集落となる。周辺地域では中期以降、春日丘陵一帯や那珂・比恵遺跡群が拠点集落として継続しており、特に春日丘陵一帯は『三国志』「魏書」東夷伝倭人条に記された「奴国」の中心的な地域と位置づけられる。

## 古墳時代

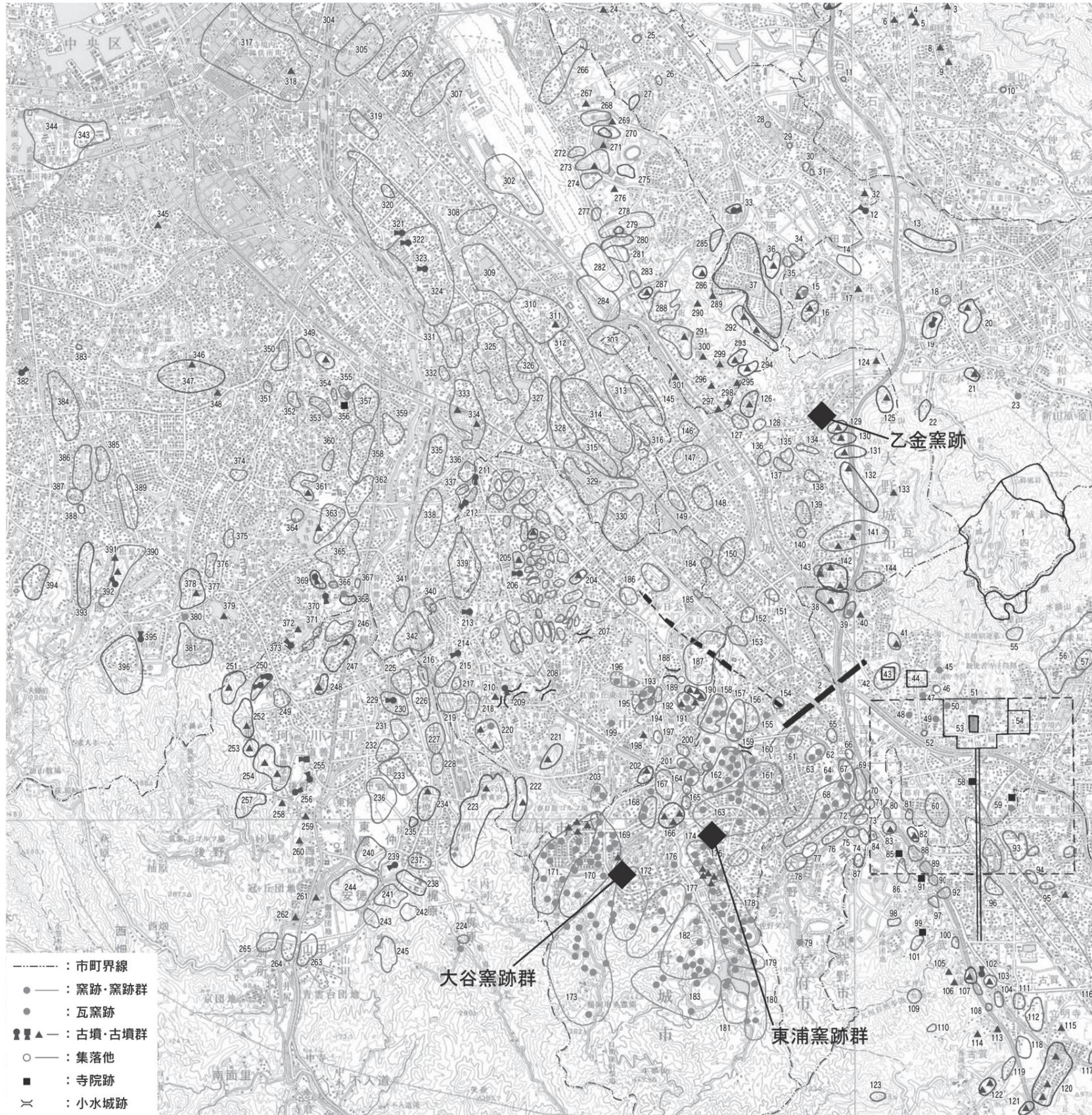
【前期】 古墳時代になると福岡平野でも前方後円墳が出現し、那珂川流域を中心に首長墓級の前方後円墳が分布する。福岡平野最古式の前方後円墳として、三角縁神獸鏡が出土した那珂八幡古墳（全長75m）がある。これに後続する盟主墳として安徳大塚古墳（全長62m）や三角縁神獸鏡が出土したとされる卯内尺古墳がある。市域において明確な前方後円墳は確認されていないが、御陵古墳群周辺にはかつて前方後円墳があったという指摘があるほか、江戸時代には三角縁神獸鏡が出土しており、有力な在地勢力が存在したと考える。

集落では、福岡平野の拠点集落として博多湾沿岸の西新町遺跡、博多遺跡群や那珂・比恵遺跡群がある。市域では仲島遺跡、石勺遺跡、村下遺跡が弥生時代後期から営まれ、瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡などでも集落が出現する。この他、森園遺跡や本堂遺跡でも再び集落の形成が認められる。

【中期】 福岡平野の盟主墳として初期横穴式石室を導入した老司古墳（全長76m）があり、博多遺跡群でも博多1号墳（全長56m）が築造される。また、剣塚北古墳、井尻B1号墳、野藤1号墳、貝徳寺古墳など中規模の前方後円墳・円墳がある。市域では5世紀前半の笹原古墳（円墳：30m）があり、隣接して5世紀後半の成屋形古墳（帆立貝式前方後円墳：32m、太宰府市）が築造され、御笠川流域の盟主墳と考えられている。5世紀後半には牛頸塚原古墳群や古野古墳群で群集墳の形成が始まる。このうち古野古墳群では、鏡・鈴・鉄剣・農工具類といった豊富な副葬品を有する古墳もあり、成屋形古墳に次ぐような有力な人物がいたことを示す。

集落遺跡は福岡平野全域で非常に希薄で、前代までの拠点集落である那珂・比恵遺跡群や西新町遺跡は消滅する。周辺では高畑遺跡、立花寺B遺跡などで滑石製品の生産を伴う集落が展開する。市域では石勺遺跡が弥生終末から続く大規模な集落で、初期のカマドや朝鮮半島系の軟質土器が出土し、滑石製品の生産も伴うことから拠点集落と位置づけられる。このほか仲島遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、金山遺跡、原田遺跡、上園遺跡などで集落が営まれる。

【後期】 福岡平野の盟主墳として6世紀中頃築造の東光寺剣塚古墳（全長75m）や日拝塚古墳（全長46m）といった前方後円墳がある。6世紀後半には大型前方後円墳は姿を消し、これに代わり6世紀後半以降、福岡平野一帯の丘陵上には直径10mほどの小円墳を主体とした群集墳が爆発的に増加する。市域では月隈丘陵から乙金山・四王寺山麓にかけて大規模な群集墳が築造され、善一田古墳群・王城山古墳群をはじめとする乙金古墳群がこれに該当する。善一田古墳群は朝鮮半島系資料や鉄器生産に関わる資料が豊富であり、王城山古墳群では7世紀を中心とした新羅土器が集中することが特徴である。このうち、善一田18号墳が最古・最大（6世紀後半築造・直径約25mの



- |                     |                     |                      |                   |
|---------------------|---------------------|----------------------|-------------------|
| 1 大野城跡              | 102 原口古墳・古墳群        | 206 竹ヶ本古墳            | 310 板付遺跡          |
| 2 水城跡               | 103 鷺田山遺跡           | 207 小倉水城跡            | 311 板付八幡古墳        |
| 3 ヨムギ古墳             | 104 大刀町遺跡           | 208 大土居水城跡           | 312 高畑遺跡          |
| 4 大塚古墳群・横穴墓群        | 105 八隈裏山古墳          | 209 天神山水城跡           | 313 井相田C遺跡        |
| 5 尾黒南古墳群            | 106 八隈山古墳           | 210 天神山古墳            | 314 委野A遺跡         |
| 6 桜塚横穴群             | 107 畑道遺跡            | 211 御陵遺跡群(古墳他)       | 315 委野B遺跡         |
| 7 乙植木古墳群            | 108 山の口遺跡           | 212 野藤1号墳            | 316 委野C遺跡         |
| 8 城山古墳群             | 109 天判山城            | 213 下白水大塚古墳          | 317 博多遺跡群         |
| 9 カヤノ古墳群            | 110 飯盛城跡            | 214 日祥塚古墳            | 318 博多1号墳         |
| 10 福岡藩砲臺御用窯         | 111 若八幡神社遺跡         | 215 辻田遺跡             | 319 駅東遺跡          |
| 11 旅石遺跡             | 112 立明寺地区遺跡         | 216 相田遺跡             | 320 比恵古墳群         |
| 12 光正寺古墳            | 113 扇塚古墳群           | 217 上白水西遺跡           | 321 銅塚北古墳         |
| 13 神領・浦尻古墳群         | 114 江永浦古墳           | 218 天神の木遺跡           | 322 東光寺銅塚古墳       |
| 14 河原田・供田遺跡群        | 115 飯島神社古墳群         | 219 門田遺跡             | 323 那珂八幡古墳        |
| 15 岩長浦古墳群           | 116 谷明院跡            | 220 ウツクチ遺跡群(古墳・瓦窯跡他) | 324 比恵・那珂遺跡群      |
| 16 観音浦古墳群           | 117 大牟田西遺跡          | 221 白水池古墳群           | 325 諸岡A遺跡         |
| 17 ウツクチ古墳           | 118 貝元遺跡            | 222 西浦古墳群            | 326 諸岡B遺跡         |
| 18 宇美中学校遺跡          | 119 トドギ遺跡           | 223 佐原遺跡群            | 327 佐原遺跡群         |
| 19 正遺古墳群            | 120 上の山古墳群          | 224 地別当遺跡群・窯跡群       | 328 三流遺跡          |
| 20 湯湧古墳群            | 121 萩原古墳群           | 225 今光・地余遺跡群         | 329 南八幡遺跡群        |
| 21 花ノ木古墳群           | 122 古賀古墳群           | 226 中原・ヒナタ遺跡群        | 330 神前原遺跡群        |
| 22 内野谷古墳群           | 123 博多見城跡           | 227 中原・塔ノ元遺跡群        | 331 五十川遺跡群        |
| 23 寺浦窯跡             | 124 唐山古墳群           | 228 カイ子遺跡群           | 332 井尻B遺跡         |
| 24 龜山古墳             | 125 乙金北古墳           | 229 貝徳寺古墳            | 333 井尻B-1号墳       |
| 25 樹角遺跡             | 126 御陵古墳群           | 230 宗石遺跡群            | 335 横手遺跡群         |
| 26 ヒエ田遺跡            | 127 塚口遺跡            | 231 松木遺跡群            | 336 寺島遺跡          |
| 27 五郎丸古墳群           | 128 御陵前の縁遺跡         | 232 屋敷ノ内遺跡群          | 337 笠波遺跡          |
| 28 方ヶ島遺跡            | 129 善一田古墳群          | 233 前田遺跡群            | 338 日佐遺跡群         |
| 29 堺田石棺墓            | 130 王城山古墳群          | 234 エグ古墳・カクチガ浦古墳群    | 339 赤水原遺跡群        |
| 30 堺田遺跡             | 131 古野古墳群           | 235 炭焼古墳群            | 340 赤水遺跡群         |
| 31 野間尻遺跡            | 132 原口古墳群           | 236 仲遺跡群             | 341 警弥塚A遺跡        |
| 32 七ヶ池古墳            | 133 此岡古墳群           | 237 下院原前遺跡群          | 342 警弥塚B遺跡        |
| 33 豊楽古墳群            | 134 松葉園遺跡           | 238 平蔵遺跡群            | 343 湯船跡           |
| 34 松ヶ下遺跡            | 135 森園遺跡            | 239 安徳大塚古墳           | 344 福岡城跡          |
| 35 松ヶ下遺跡            | 136 ヒケシマ遺跡          | 240 安徳原田遺跡群          | 345 平尾古墳          |
| 36 松ヶ丘古墳群           | 137 中ノ寺遺跡           | 241 龍頭遺跡群            | 242 穴観音古墳         |
| 37 桜ヶ丘古墳群           | 138 栗山の森遺跡          | 242 榎原ハル遺跡群          | 347 寺塚A古墳群        |
| 38 成屋形古墳群           | 139 銀山遺跡            | 243 城ノ下遺跡群           | 348 寺塚B古墳群        |
| 39 裏ノ田遺跡(窯跡他)       | 140 原門遺跡            | 244 安徳古遺跡群           | 349 野間A・B遺跡       |
| 40 裏ノ田古墳            | 141 椎子ヶ尾遺跡(窯跡他)     | 245 岩門城跡             | 350 中村町遺跡         |
| 41 陣の尾遺跡群(古墳群他)     | 142 釜蓋原古墳群          | 246 野口遺跡群            | 351 若久A遺跡         |
| 42 国分松木遺跡           | 143 金山遺跡            | 247 観音堂遺跡群           | 352 若久B遺跡         |
| 43 筑前国分尼寺跡          | 144 釜蓋原遺跡           | 248 井河古墳群            | 353 大橋B遺跡         |
| 44 筑前国分寺跡           | 145 仲島遺跡            | 249 井河遺跡群            | 354 大橋C遺跡         |
| 45 国分瓦窯跡            | 146 川原田遺跡           | 250 小丸古墳群            | 355 大橋D遺跡・三宅瓦窯跡   |
| 46 御笠田印土地           | 147 御笠の森遺跡          | 251 浦ノ原古墳群           | 356 三宅A遺跡・三宅庵寺    |
| 47 坂本瓦窯跡            | 148 村下遺跡            | 252 丸ノ口古墳群           | 357 大橋E遺跡         |
| 48 松倉瓦窯跡            | 149 権前原遺跡           | 253 白石古墳群            | 358 三宅B遺跡         |
| 49 来木古墳群(瓦窯跡他)      | 150 石ノ遺跡            | 254 荒平池古墳群           | 359 三宅C遺跡         |
| 50 来木北瓦窯跡           | 151 原ノ遺跡            | 255 妙法寺古墳群           | 360 和田A遺跡群        |
| 51 都府楼北瓦窯跡          | 152 後原遺跡            | 256 大万寺古墳            | 361 和田B遺跡群        |
| 52 遠賀田印土地           | 153 御供田遺跡           | 257 国太子古墳群           | 362 野多目A遺跡        |
| 53 大宰府政庁跡           | 154 谷川遺跡            | 258 イボリ古墳            | 363 野多目B遺跡群       |
| 54 観世音寺             | 155 出ノ遺跡(窯跡他)       | 259 墓の前古墳            | 364 野多目C遺跡群       |
| 55 岩屋城跡             | 156 上園遺跡            | 260 熊本古墳群            | 365 野多目D遺跡群       |
| 56 原遺跡              | 157 本堂遺跡群           | 261 風早古墳             | 366 老司A遺跡         |
| 57 浦城跡              | 158 柳頭遺跡群           | 262 松尾古墳群            | 367 老司B遺跡         |
| 58 櫻寺               | 159 上ノ利水城跡          | 263 小柳遺跡群            | 368 老松神社古墳群・老司瓦窯跡 |
| 59 般若寺(瓦窯跡他)        | 160 谷壺遺跡            | 264 山田西遺跡群           | 369 卯内尺古墳・古墳群     |
| 60 市ノ上遺跡            | 161 大浦窯跡群           | 265 次郎丸遺跡群           | 370 老司古墳          |
| 61 神ノ前窯跡群           | 162 野添遺跡群           | 266 席田青木遺跡群          | 371 老司池A・B遺跡群     |
| 62 専田窯跡             | 163 平田窯跡群           | 267 北ノ浦古墳            | 372 中尾古墳          |
| 63 藤原遺跡(窯跡群他)       | 164 華無尾遺跡群          | 268 中尾遺跡群            | 373 浦ノ田古墳群        |
| 64 長浦遺跡             | 165 屏風田遺跡           | 269 東谷表古墳            | 374 屋形原遺跡         |
| 65 原口遺跡             | 166 塚原遺跡群           | 270 貝花尾遺跡群           | 375 花畑C遺跡群        |
| 66 久利遺跡             | 167 日ノ浦遺跡群          | 271 大谷古墳             | 376 花畑B遺跡群        |
| 67 日焼遺跡群(窯跡群他)      | 168 畑ヶ坂遺跡群(窯跡他)     | 272 久保園遺跡            | 377 花畑A遺跡群        |
| 68 宮ノ本遺跡群(窯跡群・火葬墓他) | 169 月ノ浦1号窯跡         | 273 赤穂ノ浦遺跡           | 378 三十田古墳         |
| 69 前田遺跡             | 170 小田浦遺跡群(窯跡群・古墳群) | 274 宝満尾遺跡            | 379 箱池古墳          |
| 70 上川久保遺跡           | 171 後田遺跡群(窯跡群・古墳群)  | 275 宝満尾東古墳群          | 380 中島窯跡          |
| 71 鎌川遺跡             | 172 大谷窯跡群           | 276 上ノ池古墳            | 381 四十塚・大牟田古墳群    |
| 72 フケ遺跡             | 173 石坂窯跡群           | 277 下月隈鳥越遺跡          | 382 神松寺御陵古墳       |
| 73 尾崎遺跡             | 174 東浦窯跡群           | 278 下月隈天神森A遺跡        | 383 小雀遺跡          |
| 74 脇田遺跡             | 175 中遺跡群(窯跡群・古墳群)   | 279 天神森古墳群           | 384 長尾遺跡          |
| 75 殿城戸遺跡            | 176 城ノ山窯跡群          | 280 下月隈天神森B遺跡        | 385 樋井川A遺跡群       |
| 76 京ノ尾遺跡            | 177 原窯跡・原浦窯跡群       | 281 上月隈遺跡群           | 386 宝台遺跡群         |
| 77 カヤノ遺跡            | 178 ハセムシ窯跡群         | 282 下月隈C遺跡群          | 387 九尾台遺跡群        |
| 78 カヤノ遺跡            | 179 道ノ下窯跡群          | 283 上月隈B遺跡群          | 388 笹栗遺跡          |
| 79 野口窯跡             | 180 長者原窯跡群          | 284 立花寺古墳群           | 389 樋井川B遺跡群       |
| 80 井ノ尻遺跡(古墳他)       | 181 佐原窯跡群           | 285 立花寺古墳群           | 390 松原遺跡群         |
| 81 杉塚大坪遺跡           | 182 手足窯跡群           | 286 熊野古墳群            | 391 松原古墳群         |
| 82 銅塚遺跡(古墳群・瓦窯跡他)   | 183 足洗川窯跡群          | 287 立花寺遺跡群           | 392 松原2号墳         |
| 83 埴安神社古墳           | 184 駿河遺跡            | 288 立花寺遺跡群           | 393 東油山古墳群        |
| 84 和久堂城跡            | 185 原ノ口遺跡           | 289 七曲古墳群            | 394 瀬戸口古墳群        |
| 85 杉塚庵寺             | 186 立石遺跡            | 290 金剛山古墳群           | 395 柏原古墳群1号墳      |
| 86 脇田遺跡             | 187 九州大学筑紫地区遺跡群     | 291 金隈遺跡群・古墳         | 396 柏原古墳群         |
| 87 杉塚山の谷遺跡          | 188 春日水城跡           | 292 持田ヶ浦古墳群A群        |                   |
| 88 唐人塚遺跡(古墳群他)      | 189 向谷北遺跡           | 293 持田ヶ浦古墳群B群        |                   |
| 89 前田遺跡             | 190 向谷古墳群           | 294 持田ヶ浦古墳群C群        |                   |
| 90 塔原遺跡             | 191 春日平田北遺跡         | 295 持田ヶ浦古墳群D群        |                   |
| 91 塔原庵寺             | 192 惣利北遺跡           | 296 持田ヶ浦古墳群E群        |                   |
| 92 桶田山遺跡            | 193 惣利遺跡            | 297 持田ヶ浦古墳群F群        |                   |
| 93 峯畑遺跡             | 194 惣利東遺跡           | 298 今里不動古墳           |                   |
| 94 通ノ浦遺跡            | 195 惣利西遺跡           | 299 堤ヶ浦古墳群           |                   |
| 95 五穀遺跡             | 196 惣利壱遺跡群          | 300 影ヶ浦古墳群           |                   |
| 96 堀池遺跡             | 197 円入遺跡            | 301 丸山古墳             |                   |
| 97 大門石橋遺跡           | 198 惣利古墳            | 302 雀居遺跡             |                   |
| 98 大門遺跡             | 199 大牟田窯跡           | 303 井相田D遺跡群          |                   |
| 99 武蔵寺跡             | 200 春日平田遺跡群         | 304 壱粕遺跡群            |                   |
| 100 道場山遺跡           | 201 春日平田西遺跡         | 305 吉塚遺跡群            |                   |
| 101 武蔵寺経塚群          | 202 塚原古墳群           | 306 豊遺跡群             |                   |
|                     | 203 浦ノ原窯跡群          | 307 東比恵遺跡            |                   |
|                     | 204 須玖遺跡群           | 308 東那珂遺跡            |                   |
|                     | 205 赤井手遺跡(古墳他)      | 309 那珂君休遺跡群          |                   |

第1図 遺跡分布図(1/62,500)

円墳で、豊富な副葬品を有することから当地域の盟主的な墳墓に位置づけられる。また、市域南部では須恵器工人の墓と考えられる牛頸中通・後田・小田浦古墳群や、6世紀後半の大型円墳である日ノ浦1号墳がある。また、特殊な墳墓として、梅頭窯跡では窯跡を転用した墳墓があり象嵌大刀を副葬する。これらの横穴式石室を主体部とする古墳や群集墳は6世紀後半から7世紀にかけて築造し、8世紀代まで追葬を行うものもある。

集落は6世紀中頃以降、福岡平野の各地で再び増加する。比恵遺跡群では6世紀後半に大型建物群が出現し、「那津官家」の可能性が指摘される。市域では仲島遺跡、塚原遺跡、日ノ浦遺跡、上園遺跡、梅頭遺跡、本堂遺跡、薬師の森遺跡などで集落が営まれ、7世紀代まで存続するものが多い。仲島遺跡は集落規模が大きく、多数の掘立柱建物の存在や多量の馬骨・子持ち勾玉などの存在から、拠点的な集落と考えられる。牛頸窯跡群周辺の塚原遺跡、日ノ浦遺跡、上園遺跡、梅頭遺跡、本堂遺跡などは須恵器工人集落と位置づけられる。また、薬師の森遺跡は一部に渡来人が居住し、鉄器生産・須恵器生産に関わる集落であることが明らかになっており、先述の乙金古墳群との対応関係が確実視できる。

なお、牛頸窯跡群の開始は6世紀中頃に求められ、乙金・四王寺山麓の乙金窯跡・雉子ヶ尾窯跡もこれに近接した時期に須恵器生産を開始する。

**飛鳥時代** 7世紀前半代は集落・墳墓ともに古墳時代後期の様相を踏襲する。墳墓で注目すべきは大野城市と福岡市博多区の境界に位置する今里不動古墳で、7世紀前半前後の大型円墳（直径約30m）とされ、御笠川右岸地域の盟主墳である。また、6世紀後半の比恵遺跡群に展開した大型建物群は那珂遺跡群に移動する。この時期、牛頸窯跡群の須恵器生産はひとつのピークをむかえる。また、野添窯や月ノ浦窯などでは初期瓦を生産しており、那津官家比定地の那珂遺跡に供給されたことが知られる。牛頸窯跡群周辺では集落の数や住居の数が飛躍的に増加し、牛頸塚原遺跡、日ノ浦遺跡、上園遺跡などは前代から続く須恵器工人集落と考えられている。

7世紀中頃から後半には、中国・朝鮮半島を含む東アジア世界が激動の時代をむかえる。日本も白村江の戦（663年）で敗戦を経験し、日本史上初の国際的な危機に直面する。これに伴い664～665年にかけて水城・大野城が相次いで築造される。国内情勢でも壬申の乱（672年）が起り、これを機に律令体制に基づく本格的な中央集権国家を形成していくことになる。また、大宰府では第I期政庁が成立する。

このような時代背景の中で、市域全体で遺構・遺物の減少が認められる。例えば、薬師の森遺跡では7世紀中頃から後半にかけて一時的に遺構・遺物が希薄となり、乙金古墳群では6世紀末から7世紀前半に古墳築造のピークをむかえ、7世紀後半にかけて順次築造数が減少していく。また、牛頸窯跡群における窯の数も減少し、一時的に須恵器生産も停滞期をむかえる。

**奈良時代** 奈良時代になると律令国家が成立し、九州も大宰府を中心とした支配体制が整い、各地に官衙が設置される。また、この時期には官道も整備され、井相田C遺跡、板付遺跡、那珂久平遺跡や谷川遺跡、先ノ原・春日公園内遺跡などで道路状遺構が確認されている。集落遺跡として市域では仲島遺跡や隣接する井相田C遺跡で掘立柱建物を中心とした集落が形成される。周辺の高畑遺跡は「高畑廃寺」あるいは「那珂郡衙」の可能性が指摘され、麦野遺跡・南八幡遺跡で大規模な

村落が成立し、御笠川中流域の官道沿いに官衙や村落が営まれた景観が復元できる。牛頸窯跡群では8世紀前半に窯の数が増加し、供膳具を中心に大量生産が行われる。このほか、本堂遺跡群では村落内寺院と考えられる遺構が確認されている。また、薬師の森遺跡では集落の経営を再開し、鈔帯金具・ヘラ書き須恵器・越州窯系青磁・製塩土器などの特殊遺物が出土する。鍛冶炉に加え、須恵器窯に関連する遺構もあり、古墳時代に引き続き手工業生産に関わる集落と考えられる。

なお、水城では8世紀前半に門の建て替えがあり、東西門や欠堤部周辺を中心に水城に関わる遺構・遺物が確認されている。

**平安時代** 平安時代前半の9～10世紀代は福岡平野全域で遺跡数が減少する。牛頸窯跡群も規模が縮小し、9世紀中頃には操業を停止する。市域の遺跡も減少し、前代に見られた仲島遺跡、井相田C遺跡や麦野遺跡の集落も9世紀代に消滅する。9～10世紀代では牛頸月ノ浦窯跡、本堂遺跡、塚口遺跡、中・寺尾遺跡で土坑墓、薬師の森遺跡で土坑墓や掘立柱建物を検出している。

なお、9世紀前半に改称した鴻臚館は対外交渉の窓口として機能し、9世紀後半以降は中国商人の滞在・交易施設となり、初期貿易陶磁器が大量に出土している。

平安時代後半になると、11世紀中頃から後半に大宰府政庁・鴻臚館が廃絶し、代わって博多遺跡群において中世都市「博多」が成立する。律令制は完全に崩壊し、各地で武士が活躍する時代をむかえる。市域においては塚口遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡で輸入陶磁器を埋納する土坑墓が確認されており、有力者の存在を示す。集落は松葉園遺跡、御笠の森遺跡、宝松遺跡、上園遺跡で確認されている。なお、水城の外濠は平安時代末頃ではほぼ埋没し、西門周辺では経塚の形成や棒状土製品など土器生産に関わる遺物が集中することから、律令制の弛緩とともに本来的な役割が終焉をむかえていくこととなる。なお、土師器・瓦器焼成に関わる棒状土製品の出土は、水城西門周辺から上園遺跡、本堂遺跡周辺にかけて濃密に分布し、牛頸窯跡群終焉以降の土器生産の再開を示す。

**鎌倉時代～戦国時代** 市域では御笠の森遺跡、本堂遺跡、石勺遺跡、川原遺跡、薬師の森遺跡などで当該期の遺構が確認されている。薬師の森遺跡では12世紀後半から14世紀にかけての中世墓が多数営まれ、集落を囲むと考えられる区画溝やピット群が広がっており、比較的有力な集団が存在していたと考えられる。御笠の森遺跡は11世紀後半以降継続して集落が営まれる。16世紀後半から17世紀中頃に多数の方形区画溝が展開し、有力農民層の集落跡と考えられている。また、戦国期の山城として乙金の唐山城、牛頸の不動城があるが詳細は不明である。

**近世** 後原遺跡、御笠の森遺跡、雑餉隈遺跡、村下遺跡、川原遺跡、屏風田遺跡などで遺構・遺物が確認されるが、当該期の遺跡の多くは現在の集落域と重複していると考えられる。このうち、市域中央部の後原遺跡は「白木原村」の本村にあたり、屋敷地や墓地が確認されており、地祇神社を中心とした集落景観が復元できる。また、市域北東部の薬師の森遺跡、原口遺跡、古野遺跡では近世から近現代にかけての墓地が造られ、乙金村の集団墓地として位置づけられる。

**近代・現代** 市域北東部の王城山遺跡、古野遺跡、原口遺跡で太平洋戦争時の防空壕跡を調査しており、このうち王城山遺跡のものは規模や遺物の内容から地下疎開工場と位置づけられる。また、市域中央部の野添遺跡では、本土決戦に備え野砲を設置したと考えられる洞窟壕が確認されている。

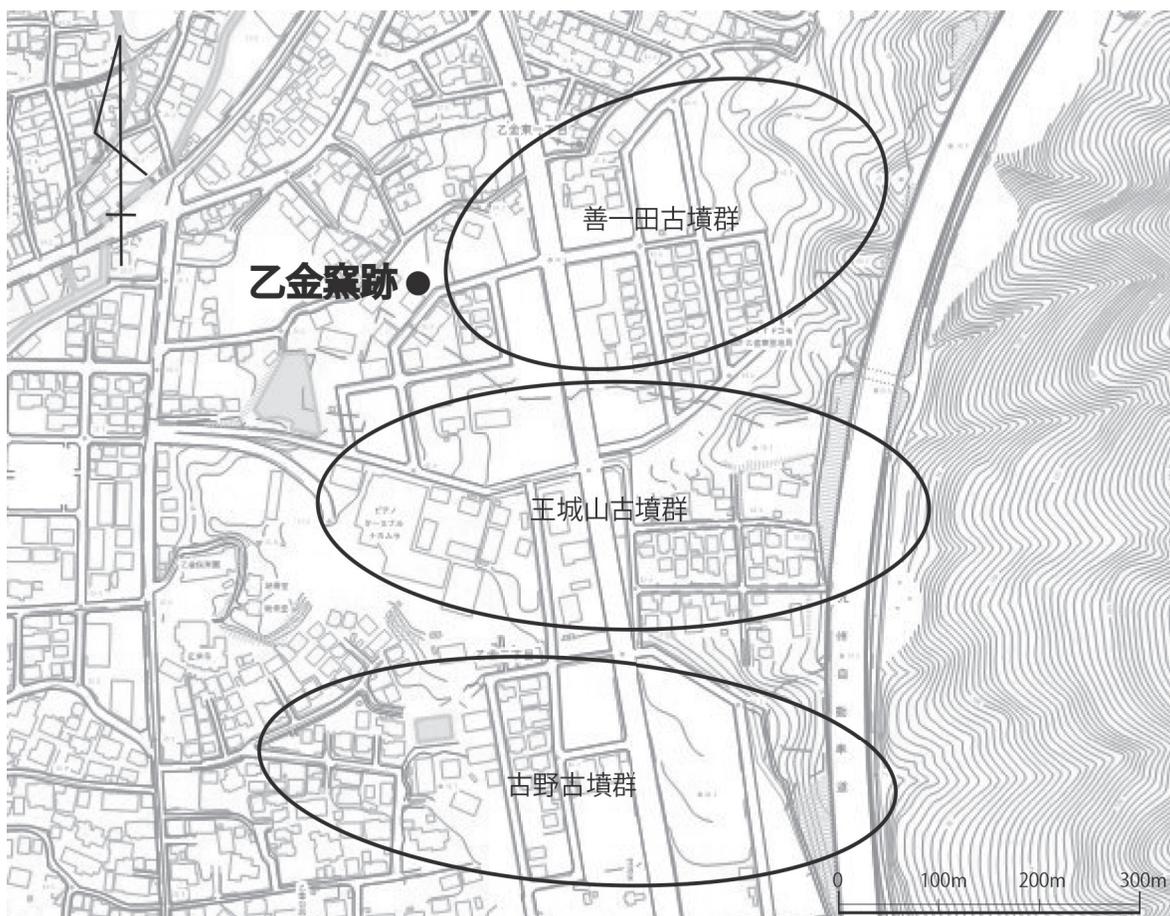
### Ⅲ. 乙金窯跡

#### 1. 調査の概要

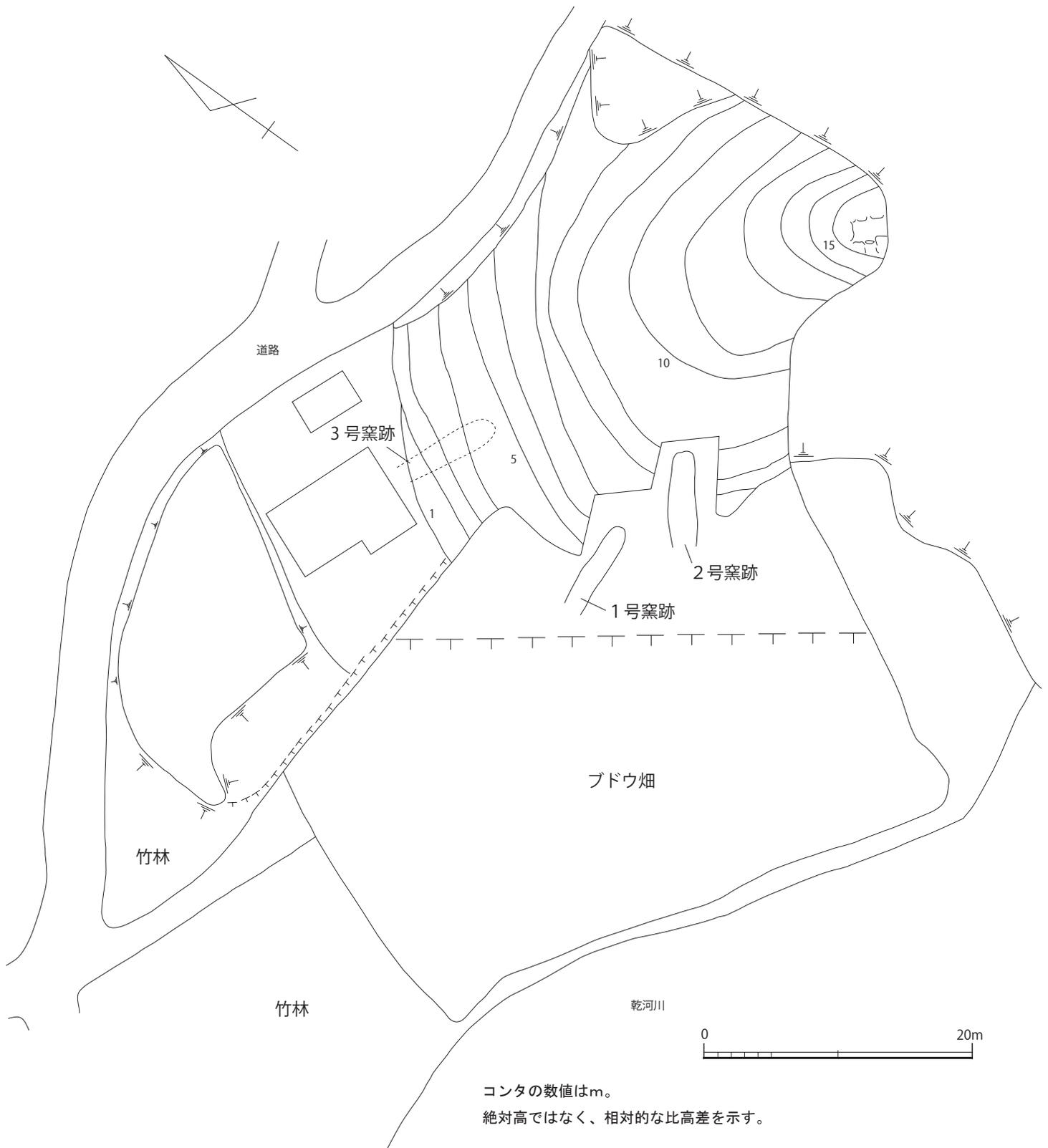
乙金窯跡は大野城市の北東部（大野城市乙金東1丁目）に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地としては善一田遺跡の範囲にあたる。乙金山（標高 263 m）の西麓に位置し、窯跡は西側に舌状にのびる丘陵の南西側斜面に構築される。昭和 44 年調査時には 3 基の窯跡が存在することが確認された。中央の窯跡を 1 号窯、東側の窯跡を 2 号窯、西側の窯跡を 3 号窯とし、このうち 3 号窯は調査を経ずに消滅した。なお、昭和 44 年時点では丘陵頂部に横穴式石室を有する古墳があったようであるが、未調査のまま消滅したため詳細は不明である。

国土舘大学による昭和 44 年の調査は、1・2 号窯を対象に実施した。調査は最終操業面のみ面的に発掘し、これ以下の操業面についてはトレンチ調査により確認を行った。出土遺物は須恵器が大半で、パンケース 7 箱分が出土した。以下では、昭和 44 年調査時の図面・写真を基に事実関係を記述するとともに、出土遺物について報告する。

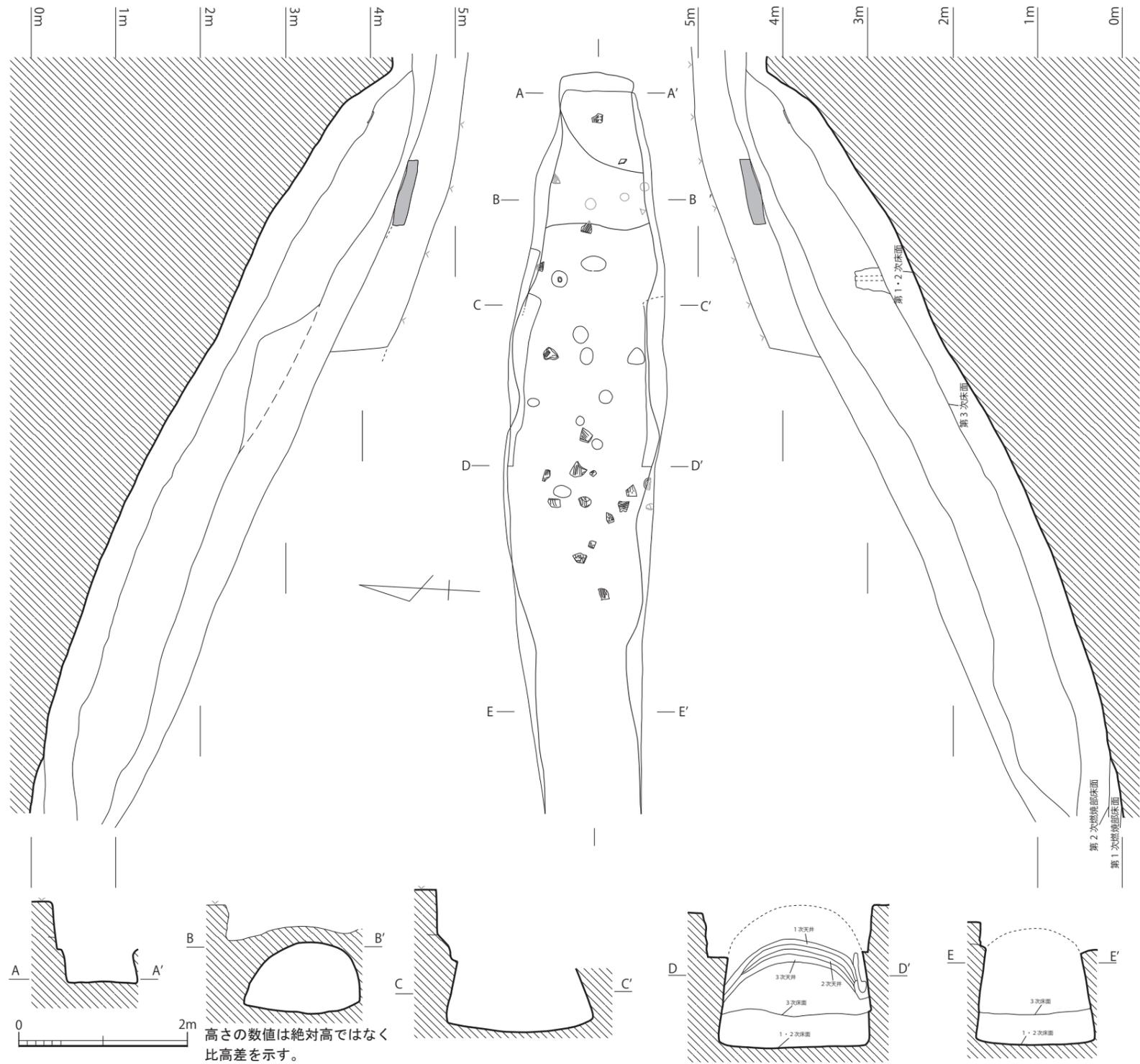
なお、平成 24 年には大野城市教育委員会が同じ地点で調査を実施し、上部が削平された状態ではあるが、昭和 44 年調査の痕跡を確認した。この際の調査は当初操業面まで面的に調査を行い、1 号窯で 4 面の操業面を確認している。以下では、基本的に昭和 44 年時の調査所見について記述し、平成 24 年度の調査所見については、大野城市文化財調査報告書第 158 集を参照いただきたい。



第 2 図 乙金窯跡調査地点位置図 (1/7, 500)



第3図 乙金窯跡遺構配置図 (1/400)



第4図 乙金窯跡1号窯跡実測図 (1/60)

## 2. 1 号窯跡

### (1) 窯の構造 (第4図、図版1～3)

地下式窖窯である。焼成部から燃焼部にかけての8.7mを検出し、全長は7.3mである。窯尻部側は一部天井部が遺存し、焼成部奥壁は煙道に接続すると考えられる立ち上がりがある。焚口部側の幅は1.2m、焼成部最大幅は1.9m、奥壁側の幅は0.9mで、平面は胴張形を呈する。窯の主軸方位はN-82°-Eである。調査は最終操業面のみを面的に実施しており、基本的には最終操業面の所見についての記述になるが、一部トレンチ調査で土層観察により複数の操業面を確認している。

なお、昭和44年調査時には操業面が3面あると認識されていたが、平成24年調査時では土層観察により4面との所見が示された。

**【焚口部・燃焼部】** 焚口部の構造は明確ではないが、焚口下層出土とした遺物が1点ある。燃焼部の構造も不明確な点が多い。2次操業面の床面は検出した窯体南端部から奥壁側の0.8mほどの範囲が平坦となっており、この付近が燃焼部と想定される。床面の幅は1.2mで、当初操業面(1次)ではこの範囲が緩やかな窪みとなっている。また、最終操業面(3次)では、窯体南端部から奥壁側へ1.4mほどの範囲に緩やかな窪みがある。燃焼部で検出した遺物はない。

**【焼成部】** 最終操業面(3次)で長さ7.1m、最大幅は1・2次操業面で1.7m、最終操業面で1.9mである。奥壁側では一部アーチ状を呈する天井部が遺存し、最終操業面からの高さは0.8～1.0mである。床面の傾斜角度は25～28度で、床面上には直径0.1～0.2mほどの小さな窪みや甕の破片が複数検出されており、焼き台と考えられる。

遺物は焼き台に使用した須恵器甕片のほか、蓋杯・高杯などが出土した。

**【煙道部】** 煙道部の構造は不明であるが、奥壁側では急激な立ち上がりが認められ、煙道へと接続するものと考えられる。出土遺物はない。

**【灰原】** トレンチ調査のみであり、規模・構造の把握はしていない。遺物は「捨て場」「ステバ」として取り上げており、須恵器蓋杯・高杯・甕・皿状製品などが出土した。

### (2) 出土遺物

#### 【焼成部 (第5図)】

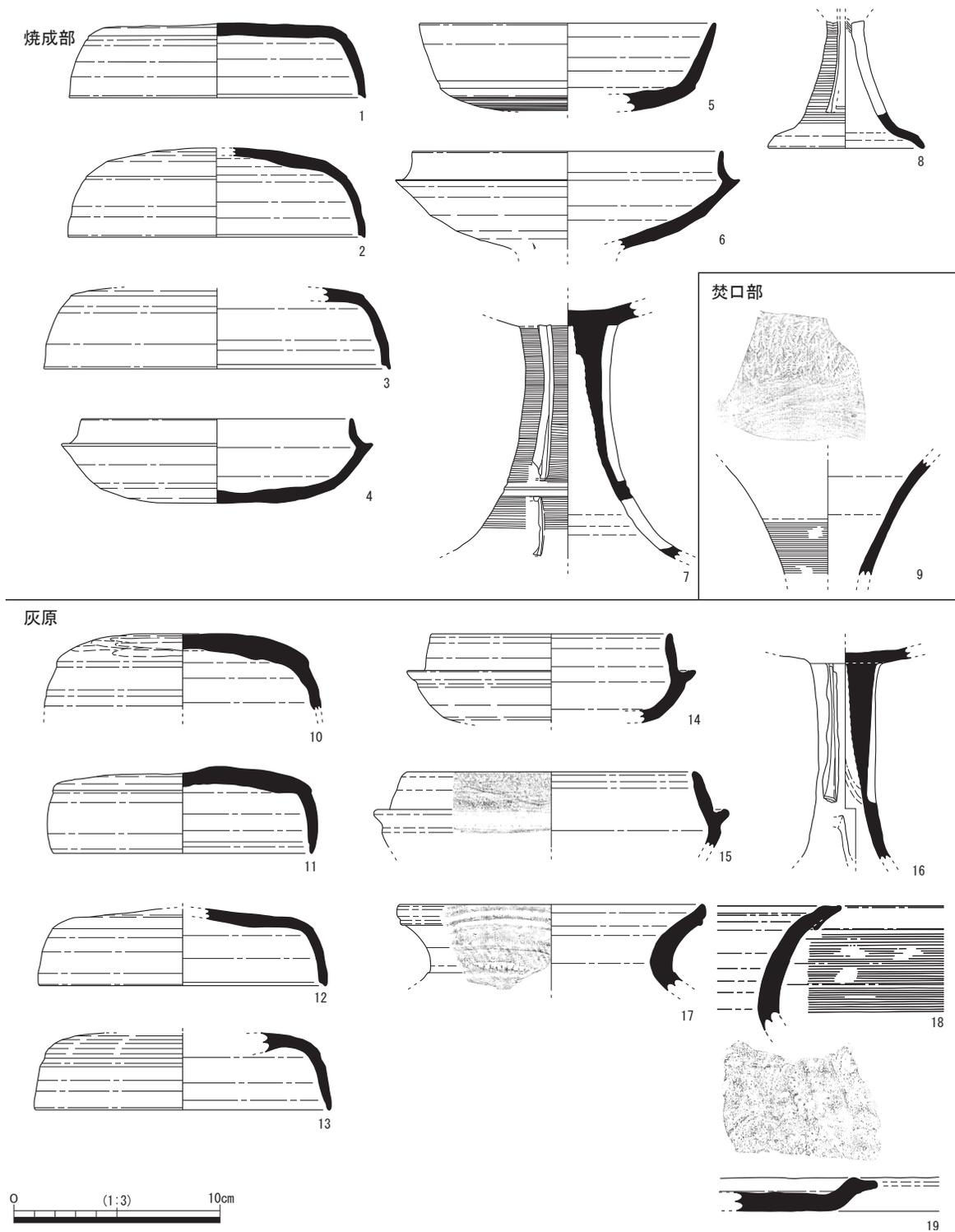
**須恵器 (1～8)** 1～3は杯H蓋で、口縁部と体部の境に浅い段があり、口縁端部に沈線状の段を有する。1は外面に、2は内面にワラ状の圧痕がある。4は杯H身で、口縁部は直立気味に立ち上がる。5は無蓋高杯の杯部で、外面にカキメを施す。6は有蓋高杯の杯部で、杯部付根に透かしの痕跡がある。7は長脚2段透かしの高杯で、上段は未貫通、下段は貫通する。内面にワラ状の圧痕がある。8は高杯脚部で、3方向に貫通する1段透かしを有する。7・8ともに外面にカキメを施す。

#### 【焚口部 (第5図)】

**須恵器 (9)** 甕の頸部片である。上半部に櫛描波状文、下半部にカキメを施す。

#### 【灰原 (第5図)】

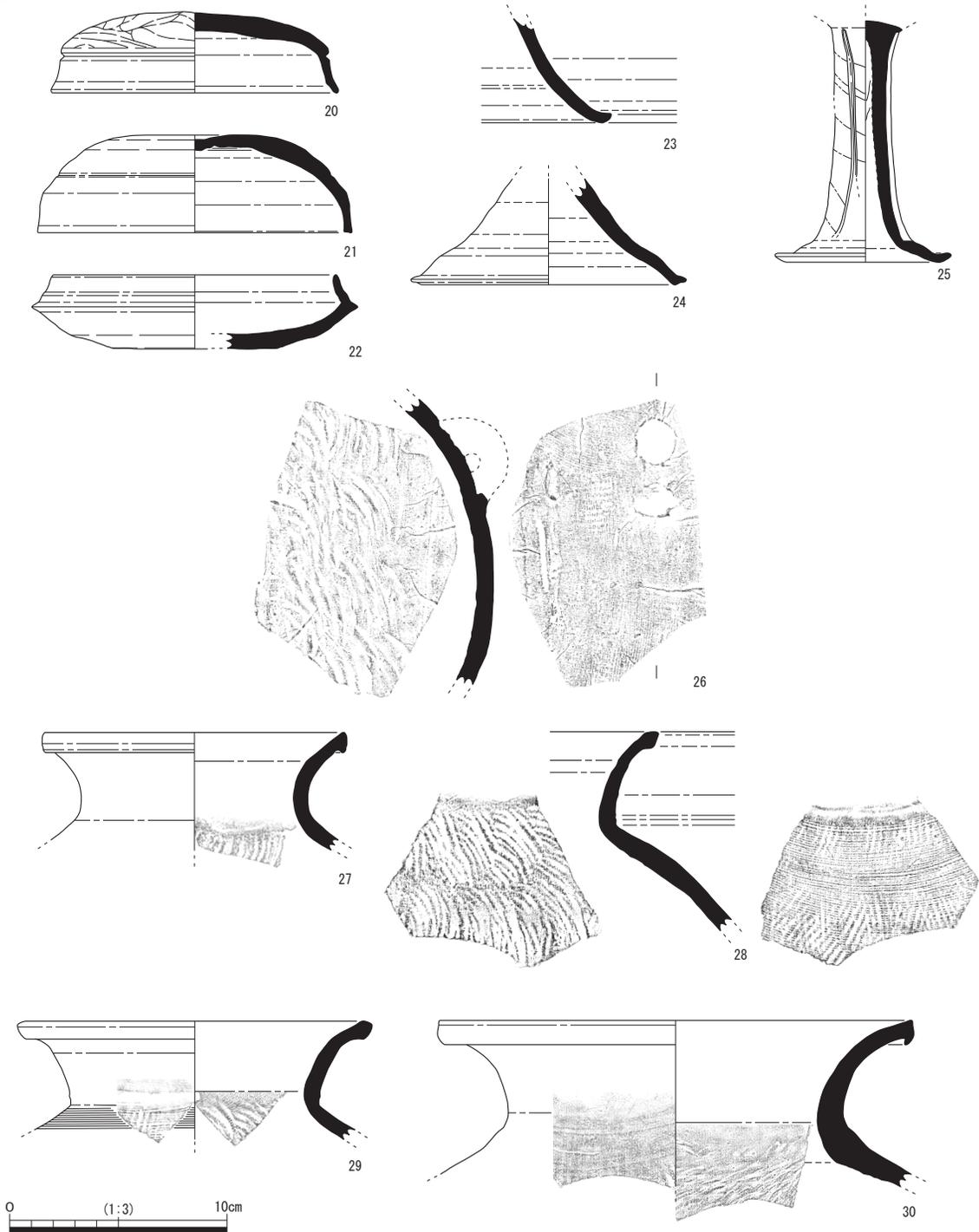
**須恵器 (10～19)** 10～13は杯H蓋である。いずれも天井部と口縁部の境に沈線が巡り、口縁端部に段もしくは浅い沈線を有する。天井部は10が手持ちヘラケズリ、他は回転ヘラケズリである。



第5図 1号窯跡出土遺物実測図① (1/3)

14・15は杯H身である。14は口縁部が直立、15は内傾する。14の底部は回転ヘラケズリである。16は長脚2段透かし高杯の脚部片である。透かしは3方向にあり、上段は未貫通、下段は貫通する。17・18は甕の口縁部片である。17は内外面ともに回転ナデで、外面に平行タタキの痕跡が残る。18は口縁端部外面が肥厚し、頸部外面にカキメを施す。19は皿状製品の破片である。内外面ともに指オサエの痕跡が顕著で、内面に当具痕が残る。

その他

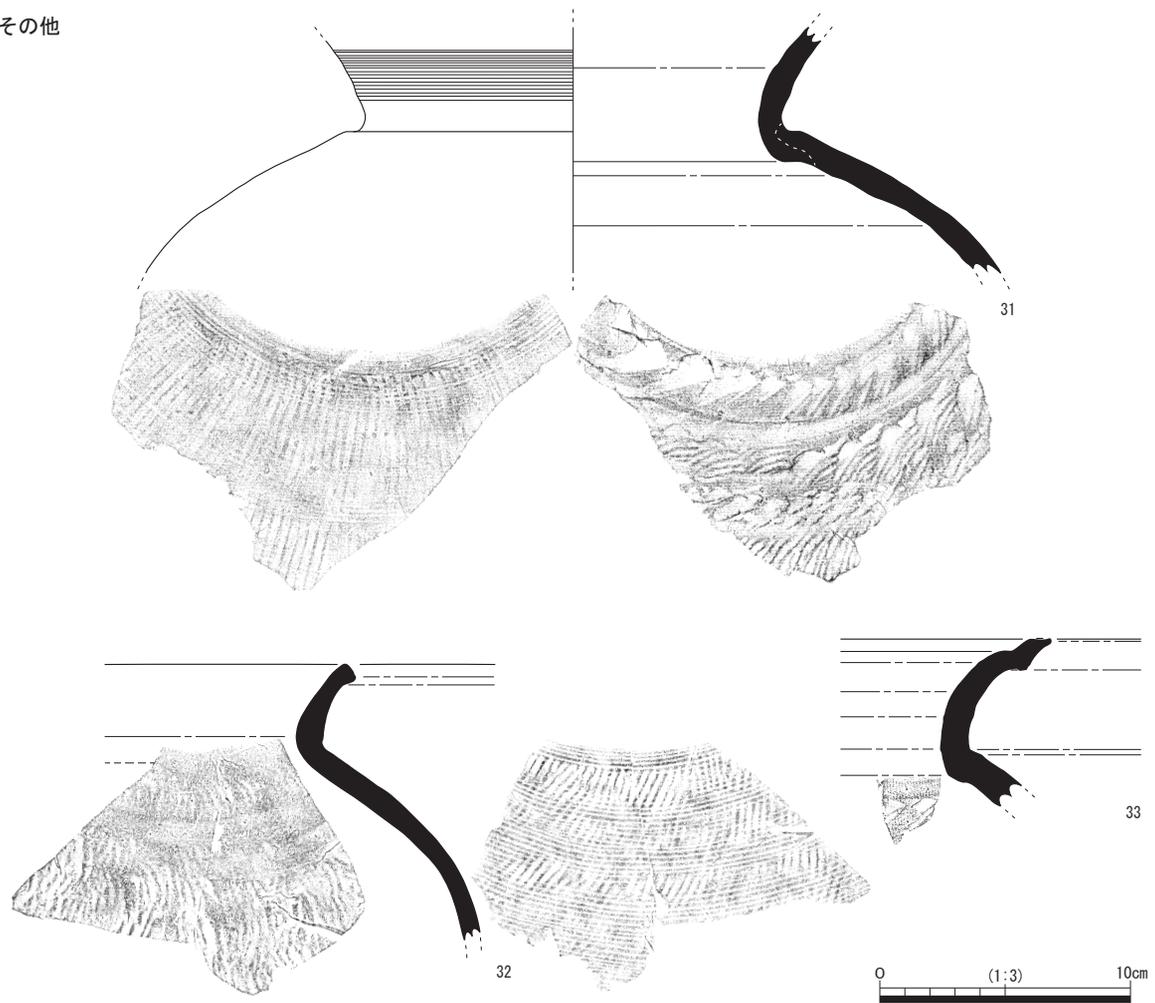


第6図 1号窯跡出土遺物実測図② (1/3)

## 【その他 (第6・7図)】

**須恵器 (20～33)** 20・21は杯H蓋である。いずれも口縁部と天井部の境に明確な沈線が巡る。20は口縁端部内面が凹面を成し、天井部は手持ちヘラケズリである。21は口縁端部が面を成し、天井部は回転ヘラケズリである。22は杯H身で、底部は回転ヘラケズリである。23～25は高杯の脚部片で、いずれも脚裾端部を外方につまみ上げる。25は3方向に未貫通の透かしを有する。26は提瓶の体部片で、肩部に環状把手を有する。タタキ成形で、内面に同心円当具痕、外面に平行タ

その他



第7図 1号窯跡出土遺物実測図③ (1/3)

タキが残り、外面を回転ヘラケズリとカキメで仕上げる。27～30は甕の口頸部片である。いずれもタタキ成形で、内面に同心円当具痕が残る。28～30は外面に平行タタキが残り、カキメで仕上げる。31～33は甕である。31・32は内面に同心円当具痕、外面に平行タタキが残り、カキメで仕上げる。33は口縁部が受口状を呈する。

### (3) 小結

1号窯は全長7.3mの地下式窖窯である。平面胴張プランで、一部アーチ状を呈する天井部を確認した。作業時期は出土遺物よりⅢA～ⅢB期古段階で、最終作業面の焼成部から出土した須恵器より、ⅢB期古段階で作業を終了したものと考えられる。

### 3. 2号窯跡

#### (1) 窯の構造 (第9図、図版1・2・4)

2号窯は1号窯の南東側5mの地点に位置する。地下式窖窯で、焼成部から燃焼部にかけて8.5mを検出し、全長7.4mである。窯尻部側は一部天井部が遺存し、焼成部奥壁側の床面中央には、煙道に接続すると考えられる溝状の掘り込みおよび立ち上がりがある。焚口部側の幅は1.3m、焼成部最大幅は2.0m、奥壁側の幅は1.4mで、平面は胴張形を呈する。窯の主軸方位はN-58° 50′ -Eである。調査は最終操業面のみを面的に実施し、一部トレンチ調査で3次にわたる操業面を確認した。

**【焚口部・燃焼部】** 焚口部の構造は不明であるが、焚口部出土遺物として杯H身、壺蓋、甕などが取り上げられている。燃焼部の構造も不明な点が多いが、1・2・3次ともに検出した窯体南端部から奥壁側へ1.5mほどの範囲の床面が平坦もしくは緩やかに窪む部分があり、この付近が燃焼部と想定される。床面の幅は1.2～1.5mである。須恵器蓋杯・壺・甕などが出土した。

**【焼成部】** 長さ6.9m、中央付近の幅は1次操業面で1.7m、2・3次操業面で1.9mであり、床面幅を拡幅していることが分かる。1・2次それぞれの床面上には、窯体の崩落土（焼土混じり）があり、順次補修・嵩上げしながら操業を行ったことを示す。奥壁側ではアーチ状を呈する天井部が一部遺存し、最終操業面からの高さは0.9mほどである。床面の傾斜角度は25度ほどで、床面上には甕の破片が複数検出されており、焼き台と考えられる。また、焼成部右側の床面には幅0.2mほどの溝状の落ち込みが表現されているが、詳細は不明である。

遺物は蓋杯や焼き台に使用した須恵器甕片が出土した。また、「窯尻」出土として取り上げられた直口壺・提瓶・甕などもあるが、これらも焼成部に帰属するものであろう。

**【煙道部】** 奥壁に接して、床面中央に幅0.3m、深さ0.15mの溝状の落ち込みが長さ0.5mにわたりのびており、煙道へと連なるものであろう。奥壁は直立して立ち上がる。出土遺物はない。

**【灰原】** トレンチ調査のみであり、規模・構造の把握はしていない。遺物は「捨て場」「ステバ」として取り上げており、須恵器蓋杯・甕などが出土した。

#### (2) 出土遺物

##### 【焼成部 (第8図)】

**須恵器 (34～41)** 34～38は杯H蓋である。いずれも口縁部と天井部の境に沈線もしくは段が巡り、口縁端部に沈線が巡る。天井部は回転ヘラケズリで、35は内面に同心円当具痕、外面にヘラ記号を有する。39は杯H身で、外面にヘラ記号を有する。40は小型の壺で、口縁部は短く外反する。41は甕の口縁部片で、外面にカキメと櫛描波状文を施す。

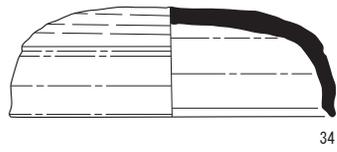
##### 【焚口部 (第8図)】

**須恵器 (42～44)** 42は杯H蓋で、内面に当具痕が残る。43は杯H身である。底部は回転ヘラケズリで、外面にヘラ記号を有する。44は甕の口縁部片で、口縁端部と口縁直下に櫛描波状文を施す。

##### 【燃焼部 (第8図)】

**須恵器 (45～51)** 45～49は杯H蓋である。いずれも天井部は回転ヘラケズリで、口縁端部は

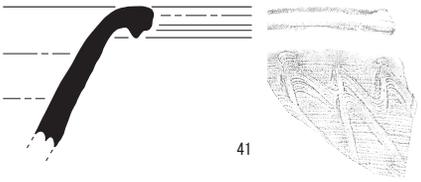
烧成部



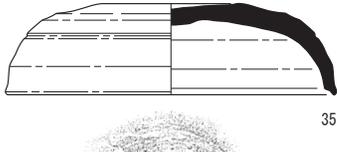
34



37



41



35



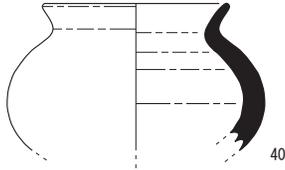
38



39



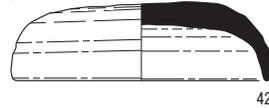
36



40



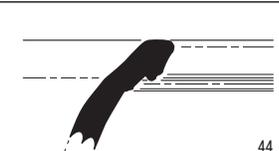
焚口部



42



43



44



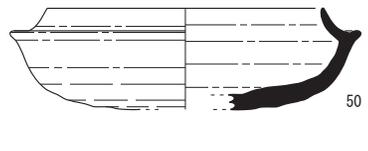
燃烧部



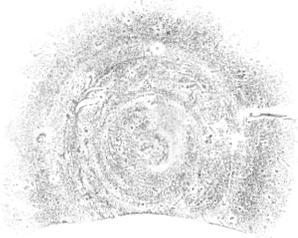
45



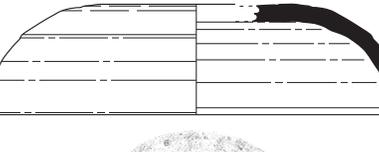
48



50



46



49



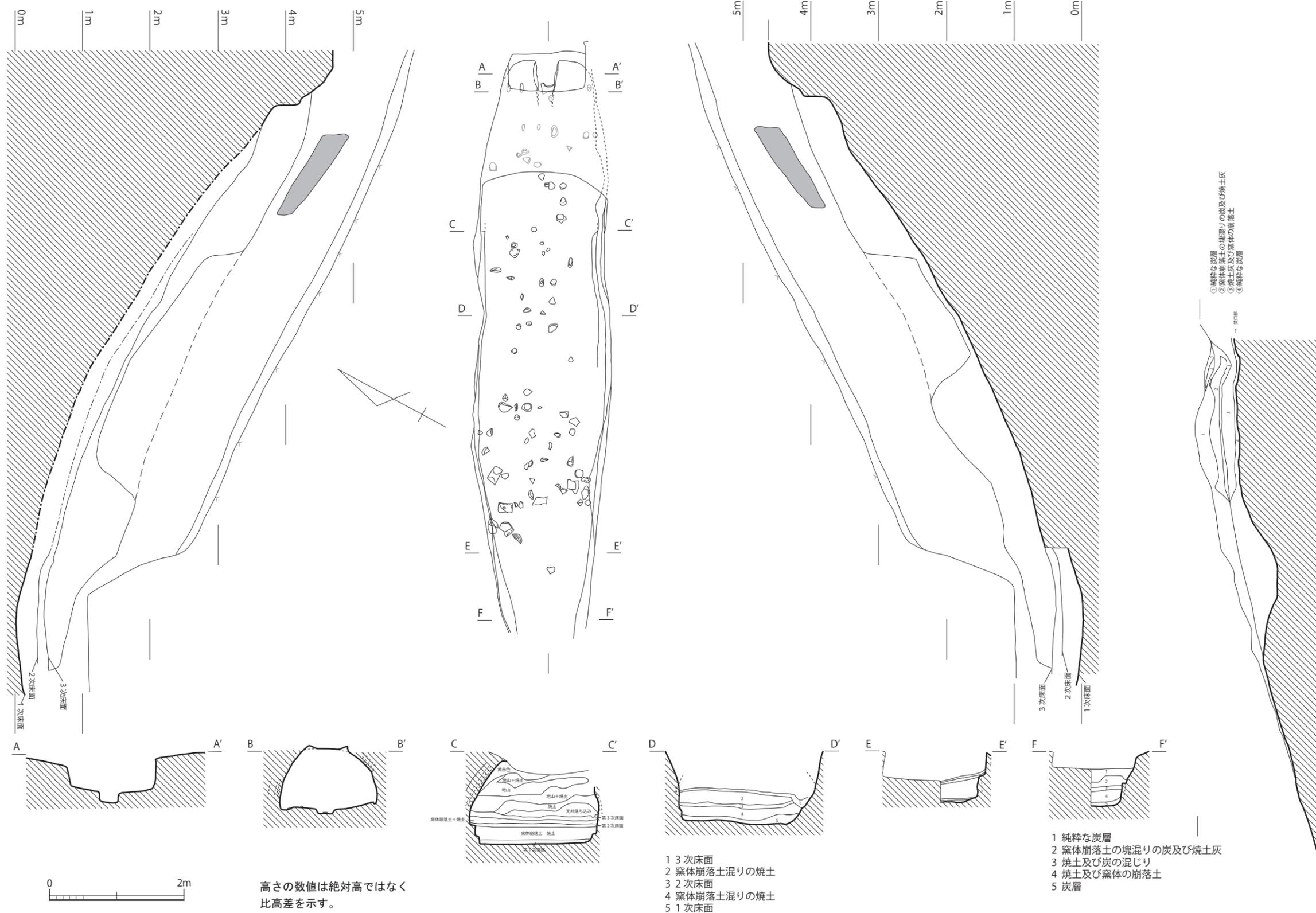
51



47

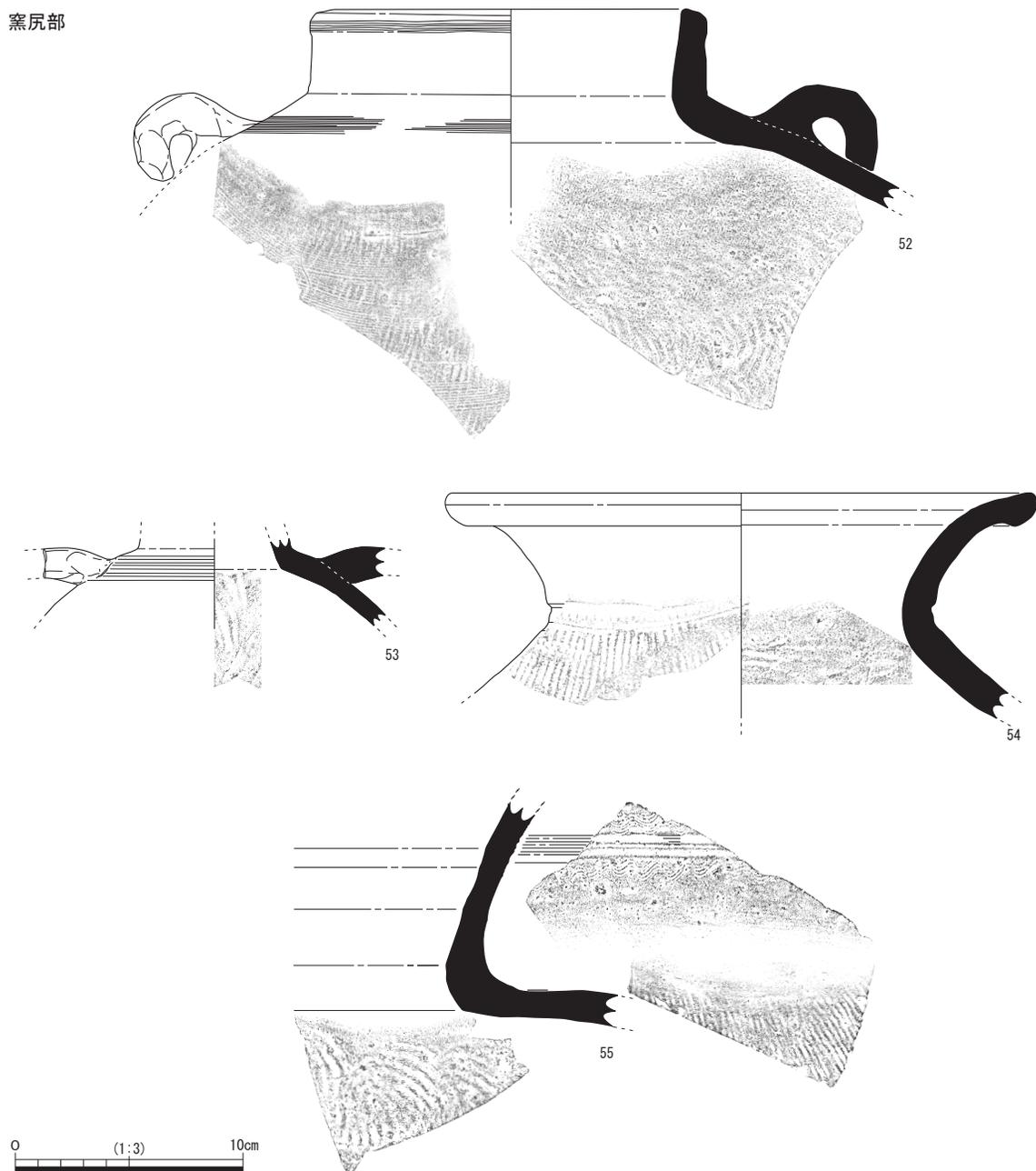


第8图 2号窯跡出土遺物実測图① (1/3)



第9図 乙金窯跡2号窯跡実測図 (1/60)

窯尻部



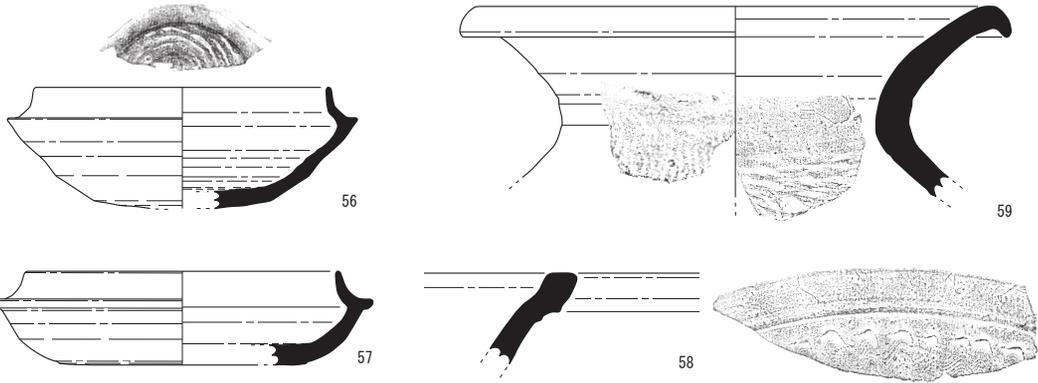
第10図 2号窯跡出土遺物実測図② (1/3)

沈線状もしくは面を成す。45・48・49は内面に同心円当具痕が残る。50・51は杯H身である。いずれも底部は回転ヘラケズリで、51は内面に同心円当具痕が残る。

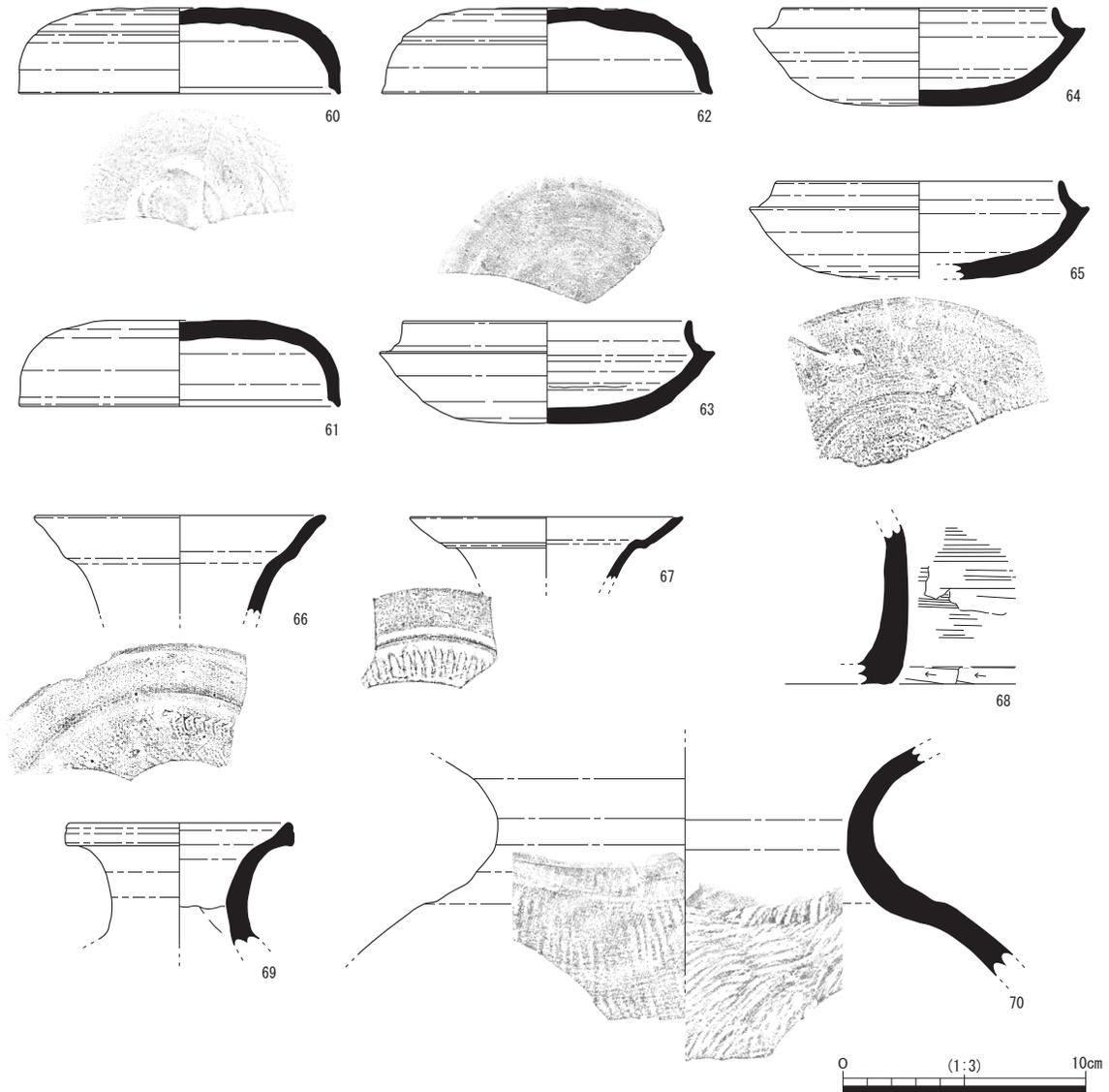
#### 【窯尻部 (第10図)】

**須恵器 (52～55)** 52は両耳付の直口壺である。口縁部は直立して短く立ち上がり、口縁端部は面を成す。肩部の2ヶ所に環状把手を有し、外面は平行タタキ、内面は同心円当具痕が残る。肩部及び口縁部の一部にカキメを施す。53は提瓶の肩部片である。把手は部分的に欠損するが、環状を呈するものであろう。肩部外面にカキメを施し、内面に当具痕が残る。54・55は甕の口頸部片である。54は外面には平行タタキ、内面には当具痕が残る。55は頸部を沈線で区画し、上下に櫛描波状文を施す。

灰原



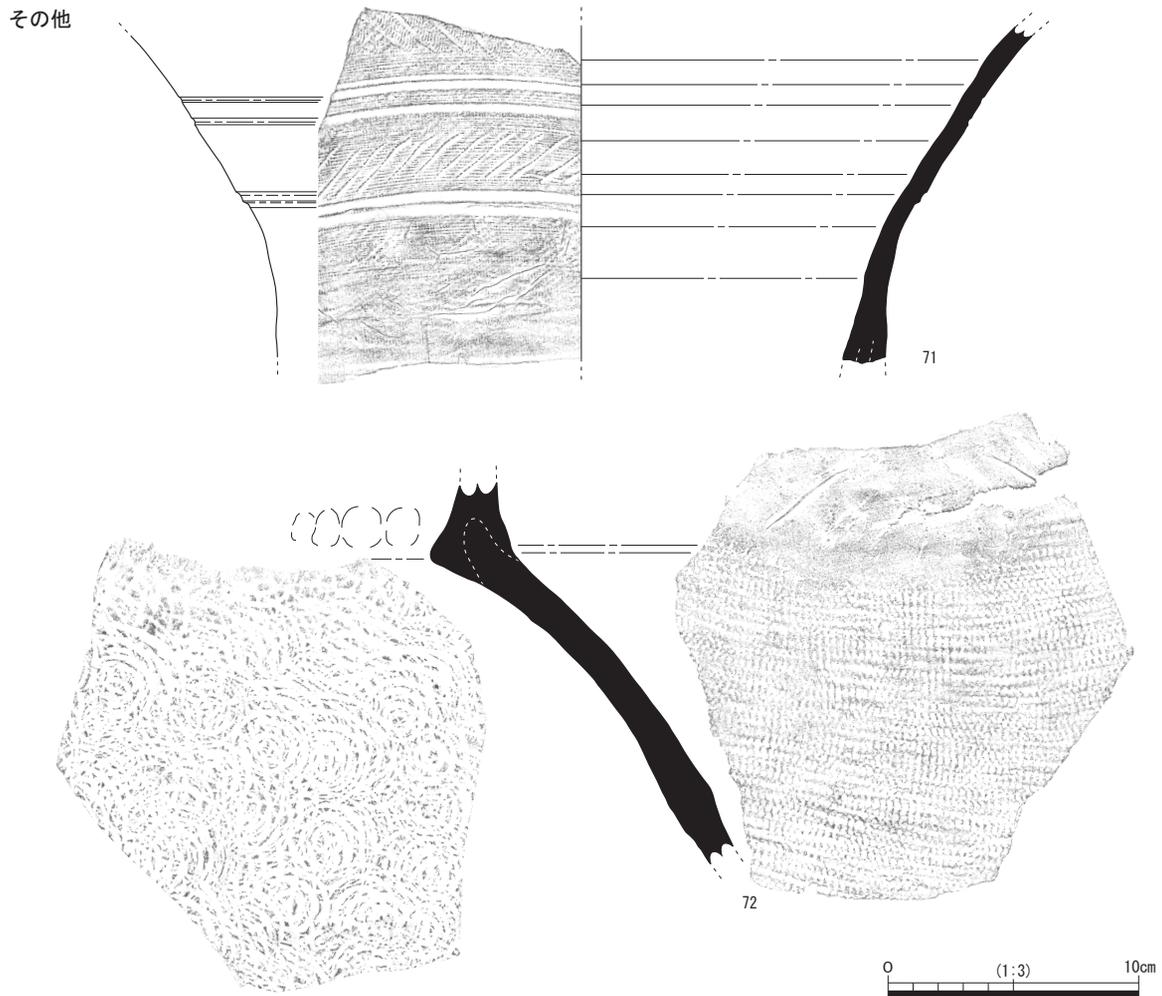
その他



第11図 2号窯跡出土遺物実測図③ (1/3)

【灰原 (第11図)】

**須恵器 (56～59)** 56・57は杯H身で、底部は回転ヘラケズリ、56の内面には同心円当具痕が残る。58・59は甕の口縁部片である。58は口縁端部の断面が方形を呈し、楕円描波状文を施す。59は口縁端部が外傾し、外面に平行タタキ、内面に当具痕が残る。



第12図 2号窯跡出土遺物実測図④ (1/3)

## 【その他 (第11・12図)】

**須恵器 (60～72)** 60～62は杯H蓋である。いずれも口縁端部は沈線もしくは面を成し、60・62は天井部と口縁部の境に沈線が巡る。天井部は回転ヘラケズリで、60の内面には当具痕が残る。63～65は杯H身で、いずれも底部は回転ヘラケズリである。65は底部にヘラ記号を有し、63は内面に当具痕が残る。66・67は壺の口頸部片で、頸部外面に櫛描波状文を施す。67は口縁端部が面を成し、口縁部と頸部の境には水平面を有する。68は瓶類の底部片である。体部外面はカキメで、底部と体部の境にヘラケズリを施す。内面には当具痕が残る。69は口縁部片で、小型甕もしくは壺であろう。70～72は甕である。70の外面は平行タタキ後カキメ、内面には当具痕が残る。71は頸部に櫛描波状文、斜線文、カキメを施す。頸部・体部接合面は擬口縁状を呈する。72は肩部の破片で、体部外面は擬格子タタキ、内面は同心円当具痕が残る。頸部内面の付け根に指オサエ痕が顕著に残る。

## (3) 小結

2号窯は残存長7.4mの地下式窖窯である。平面胴張形で、一部アーチ状を呈する天井部を確認した。操業時期は出土遺物よりⅢA～ⅢB期古段階で、最終操業面の焼成部から出土した須恵器より、ⅢB期古段階で操業を終了したものと考えられる。

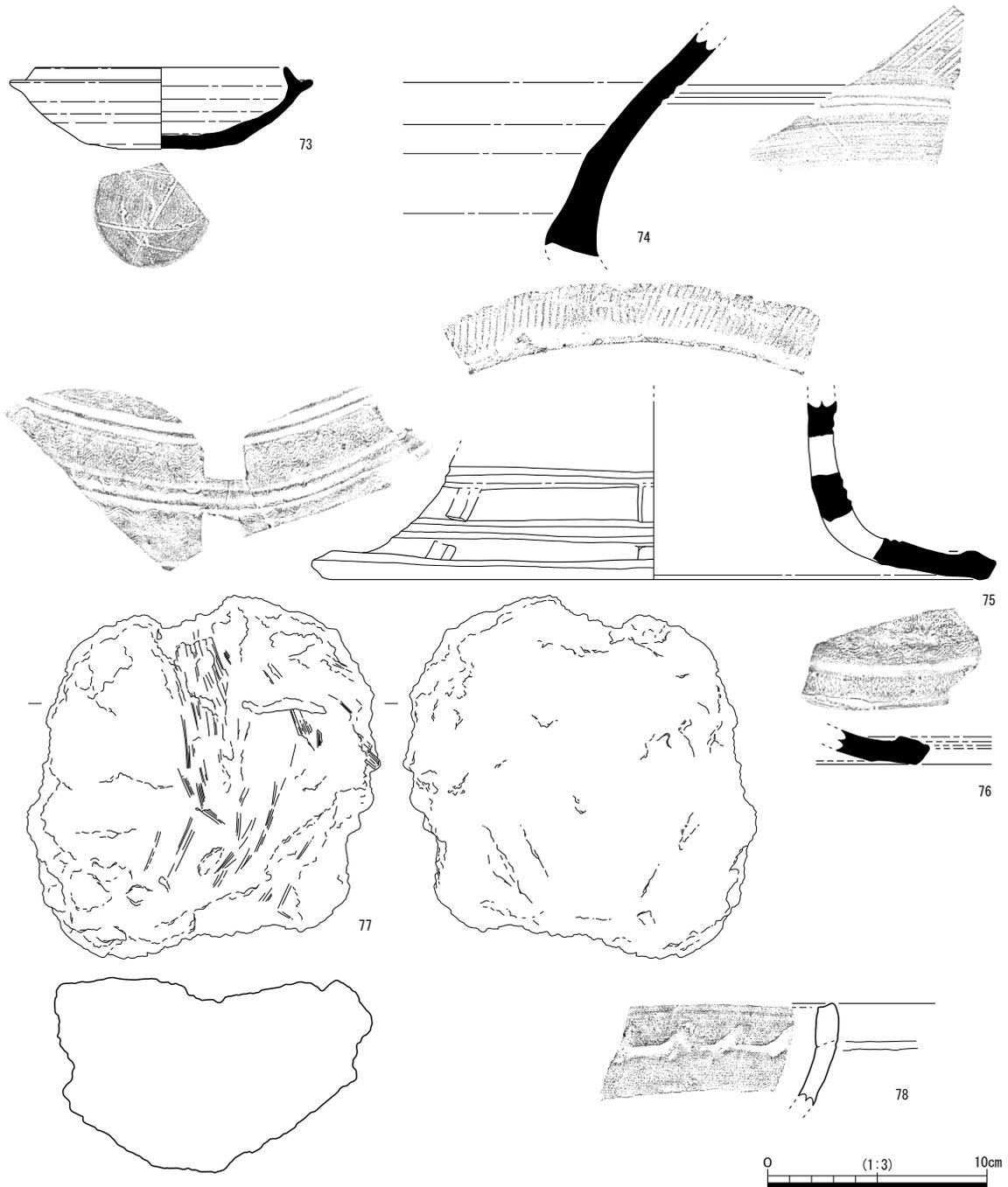
## 4. 出土地点不明遺物

## 出土遺物 (第13図)

**須恵器 (73～76)** 73は杯H身である。底部は回転ヘラケズリで、外面にヘラ記号を有し、内面に当具痕が残る。74は甕の頸部片で外面に斜線文を施す。頸部・体部接合面は擬口縁状を呈し、接合のための刻目がある。75・76は器台の脚部片で、接合しないが同一個体の可能性がある。大きく歪むため、本来の傾きは不明だが、裾部は大きく広がる。裾端部は面を成し上面は肥厚する。沈線により区画した内部に櫛描波状文を施し、上下に直列した長方形の透かしを有する。

**土製品 (77)** 焼成粘土塊で、窯壁の一部であろう。スサを混入する。

**縄文土器 (78)** 浅鉢で、内外面ともにナデである。



第13図 乙金窯跡出土地点不明遺物実測図 (1/3)

## IV. 東浦窯跡群

### 1. 調査の概要

東浦窯跡群は大野城市の南部（大野城市南ヶ丘5丁目）に所在する。牛頸山（標高 447 m）の北麓に位置し、窯跡は北西側にのびる丘陵の南から西側斜面に構築される。

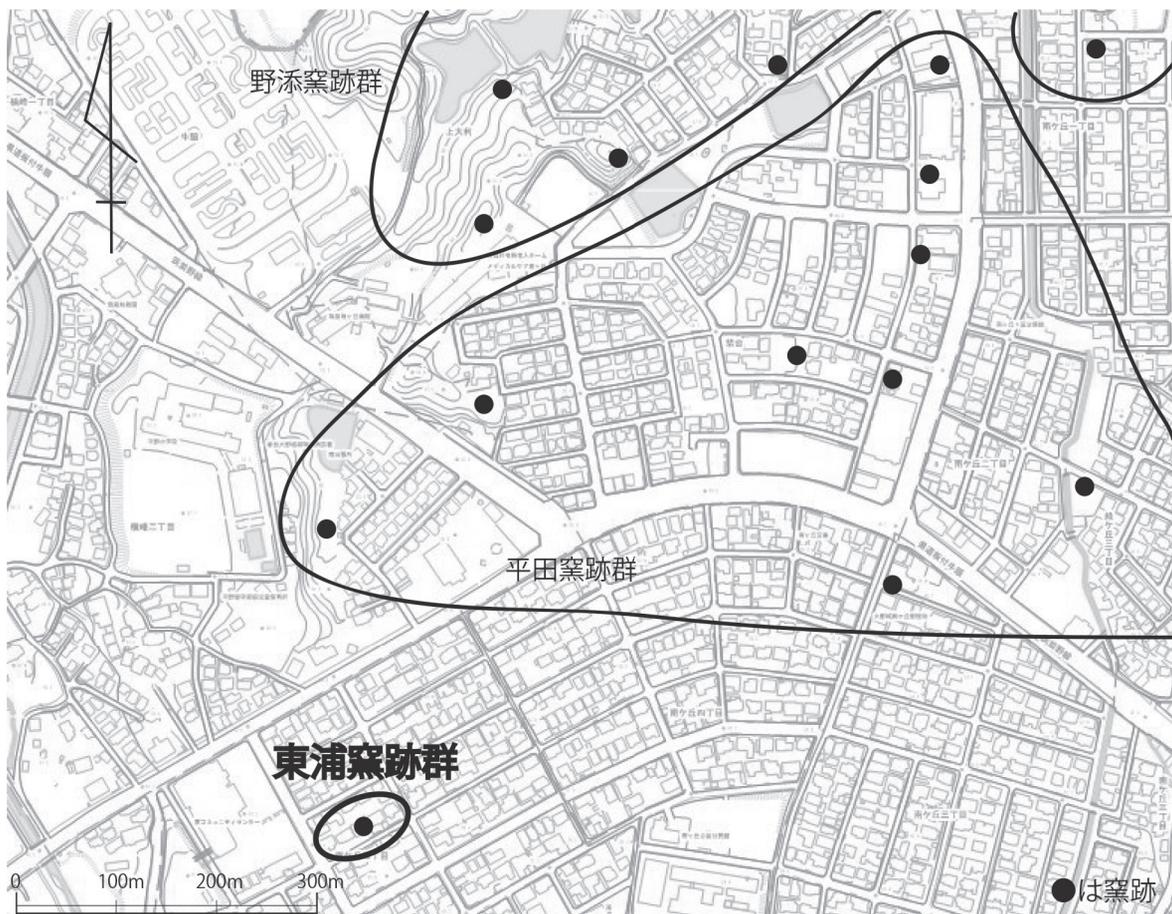
国士舘大学による昭和 43 年の調査で、3 基の窯跡が確認され、それぞれ東側を 1 号窯、西側を 2 号窯、中央を 3 号窯として調査を実施した。出土遺物は須恵器が大半で、パンケース 23 箱分が出土した。

以下では、昭和 43 年調査時の図面・写真を基に事実関係を記述するとともに、出土遺物について報告する。

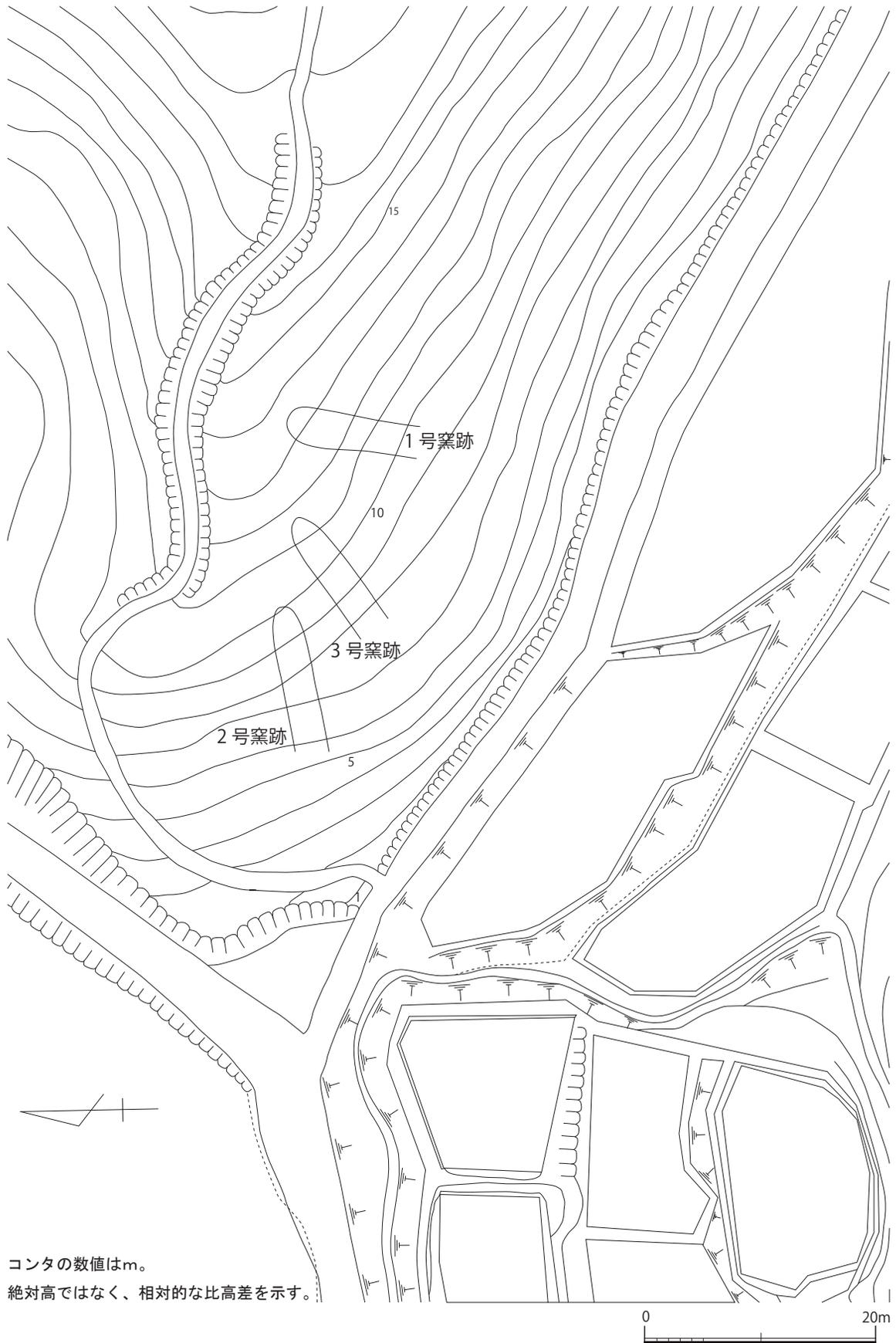
### 2. 1 号窯跡

#### (1) 窯の構造（第 16 図、図版 5～8・20）

地下式窖窯である。燃烧部から窯尻部まで 14 m を検出した。燃烧部・窯尻部の絞り込みはなく、平面寸胴形を呈し、全長 8.9 m である。燃烧部付近と煙道部は一部天井部が遺存し、複数の排煙口を有する多孔式煙道窯である。窯の主軸方位は N-14° -W である。調査の結果、2 次にあたる作業面を確認した。



第 14 図 東浦窯跡群調査地点位置図 (1/7, 500)



コンタの数值はm。  
絶対高ではなく、相対的な比高差を示す。

第15図 東浦窯跡群遺構配置図 (1/500)



**【焚口部・燃焼部】** 現状で長さ 3.6 m、幅は焼成部側で 2.2 m、焚口部側で 3.3 mで、やや開き気味となる。当初操業面の床面（もしくは床面下）には、長さ 3 m、幅 1.1 m、深さ 0.5 mの舟底状ピットがある。最終操業面の床面は平坦である。なお、右壁には壁体に埋め込まれるように石組がある。拳大から人頭大の礫を使用し、長さ 0.6 m、高さ 0.6 mの範囲で石組を行い、小礫や窯壁片で目詰めする。石組下端が最終操業時の床面と同一であることから、窯体の補修に伴うものと考えられる。燃焼部から焚口部にかけては縦断土層図を作成しており、16層に分層される。基本的には炭化物・焼土を含む土層で、自然堆積の状況を示す。焚口部出土として取り上げられた土器は多くあり、完形品を含む須恵器蓋杯・高杯などがある。これらの出土状況の詳細は不明であるが、平面図で燃焼部と焼成部の境に、蓋杯類と考えられる図が示されており、写真でも確認できることからこれに該当する可能性がある。本来的には最終操業面の焼成部に伴うものであろうか。

**【焼成部】** 長さ約 7.0 m、最大幅は 2.3 mである。燃焼部との境にはアーチ状を呈する天井部が遺存し、最終操業面からの高さは 0.7～0.9 mである。床面の傾斜角度はおおむね 30度で、中央から下部にかけての床面上には、焼き台や甕の破片が密集して検出されたほか、先述したとおり完形品に近い蓋杯類が出土した。

**【煙道部】** 3つの排煙口が横一列に並ぶ多孔式煙道で、一部、天井部が遺存し、奥壁までの水平長は約 1.6 mである。地山を掘り抜いたものか、粘土などで構築したものかは不明である。各排煙口の直径は 0.7～0.8 m程度である。

**【溝】** 煙道部の左側に溝が接続する。溝は北側に 1.6 mのびた後、西側に直角に折れ、3 mほど直線的にのびる。煙道部と接続する部分で上端幅 1.5 m、下端幅 1.0 m、深さは 0.3～0.4 mで、断面 U字形を呈する。遺物は須恵器杯 H 蓋が出土した。

**【前庭部】** 規模・構造は不明であるが、前庭部出土遺物として須恵器蓋杯・高杯・壺・甕などが取り上げられている。

**【灰原】** 詳細は不明であるが、遺物は須恵器蓋杯・高杯・平瓶・すり鉢などが出土した。

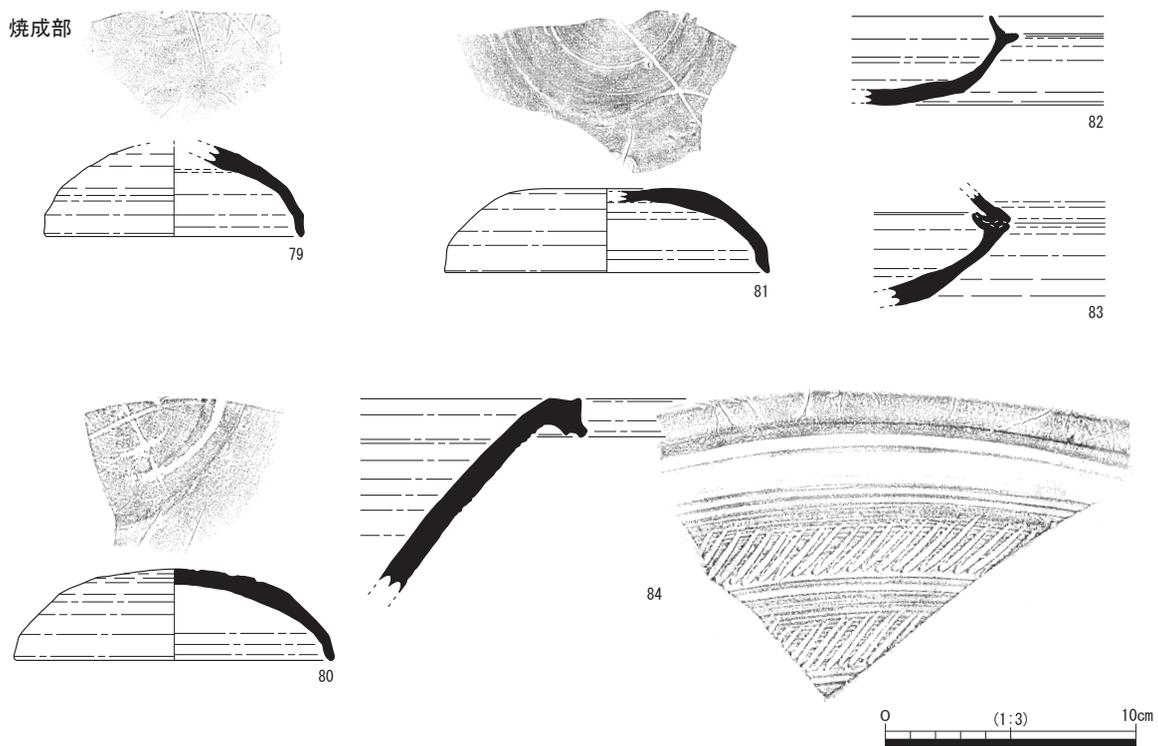
## (2) 出土遺物

### 【焼成部 (第 17 図)】

**須恵器 (79～84)** 79～81 は杯 H 蓋で、天井部は回転ヘラケズリである。いずれも外面にヘラ記号を有する。82・83 は杯 H 身で、底部は回転ヘラケズリである。83 は口縁部に別個体が付着する。84 は甕の口縁部片である。外面を沈線で区画し、上下に連続斜線文を施す。

### 【焚口部 (第 18 図)】

**須恵器 (85～113)** 85～94、96～98 は杯 H 蓋である。口径はおおむね 12～13 cmである。いずれも天井部は回転ヘラケズリで、89・90・93 は外面にヘラ記号を有する。85・87・88・93・94 は天井部が丸みを帯び、内面に指頭痕が残る。これらは器高が高く、全体が丸みを帯びた形態であることが特徴で、東浦 2号窯の資料とも共通した様相である。95 は杯 B 蓋で、口縁部にカエリを有する。天井部は回転ヘラケズリである。99～111 は杯 H 身で、口径はおおむね 10～11 cmである。口縁部の立ち上がりは長短あるが、いずれも内傾する。底部は 102 が手持ちヘラケズリ、他は回転ヘラケズリである。99・102・103 は底部内面に指頭痕が残る。106・107 は外面にヘラ記号を有する。



第17図 1号窯跡出土遺物実測図①(1/3)

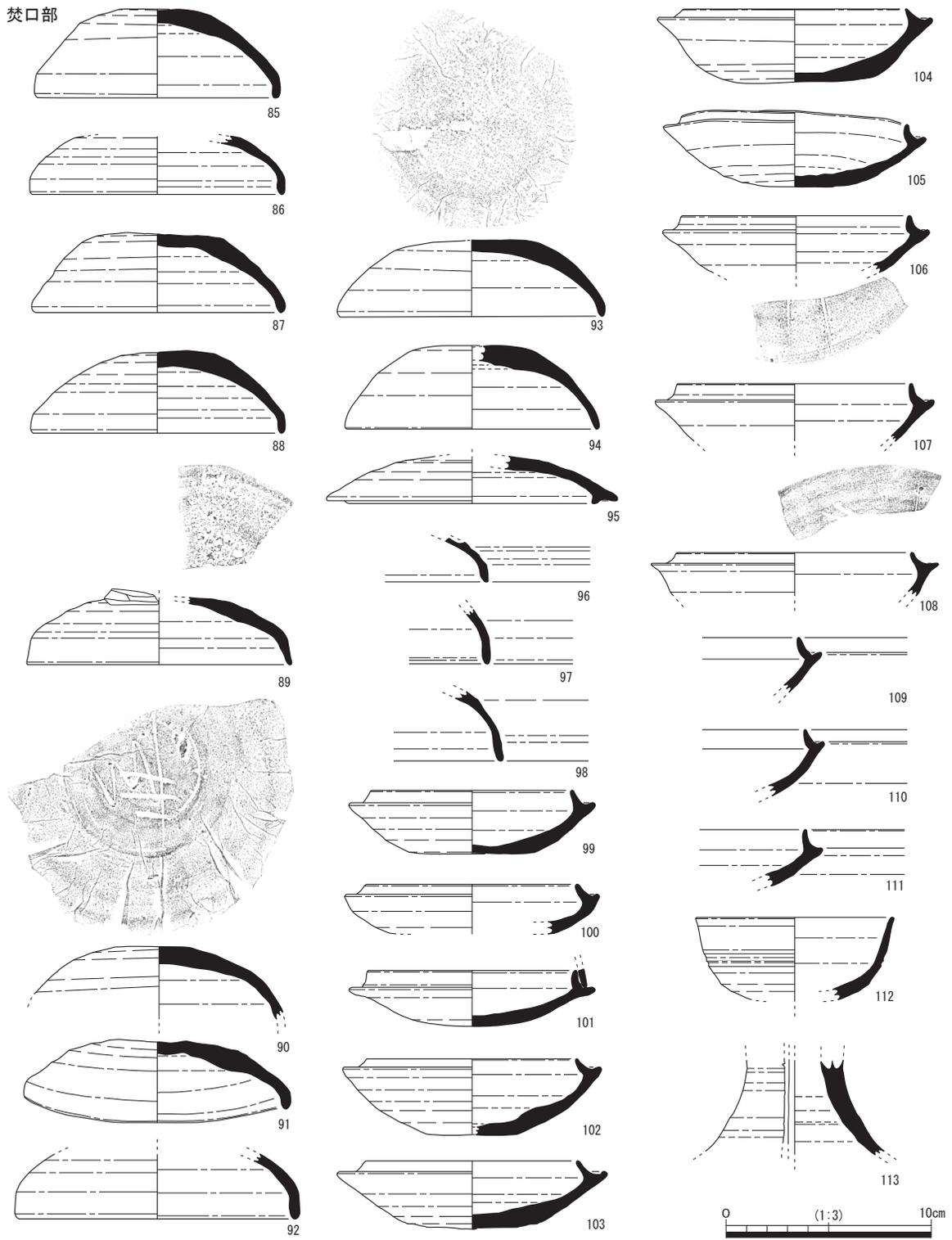
112は無蓋高杯の杯部片で、体部に2条の沈線が巡る。113は高杯の脚部片で、3ヶ所に貫通する透かしを有する。

#### 【前庭部(第19図)】

**須恵器(114～123)** 114～116は杯H蓋である。口径12～13cmで、天井部はいずれも回転ヘラケズリである。114・116は天井部の内面に指頭痕が残り、天井部は丸みを帯び、外面にヘラ記号を有する。117は杯H身で、底部は回転ヘラケズリである。118・119は短脚高杯の脚部である。118は外面に沈線が巡り、119は内面にヘラ記号を有する。120・121は小型の壺である。120は口縁部が直立し、肩部にカキメを施す。121は口縁部が肥厚し、頸部は「く」字に屈曲する。体部は扁球形で、肩部に2条の沈線、最大径の位置にカキメを施す。122は壺の体部で、肩部に2条の沈線が巡る。123は大甕の口頸部片である。口縁部は肥厚し、端部を上方に跳ね上げる。外面を沈線で区画し、上下2段の波状文を施す。

#### 【灰原(第20図)】

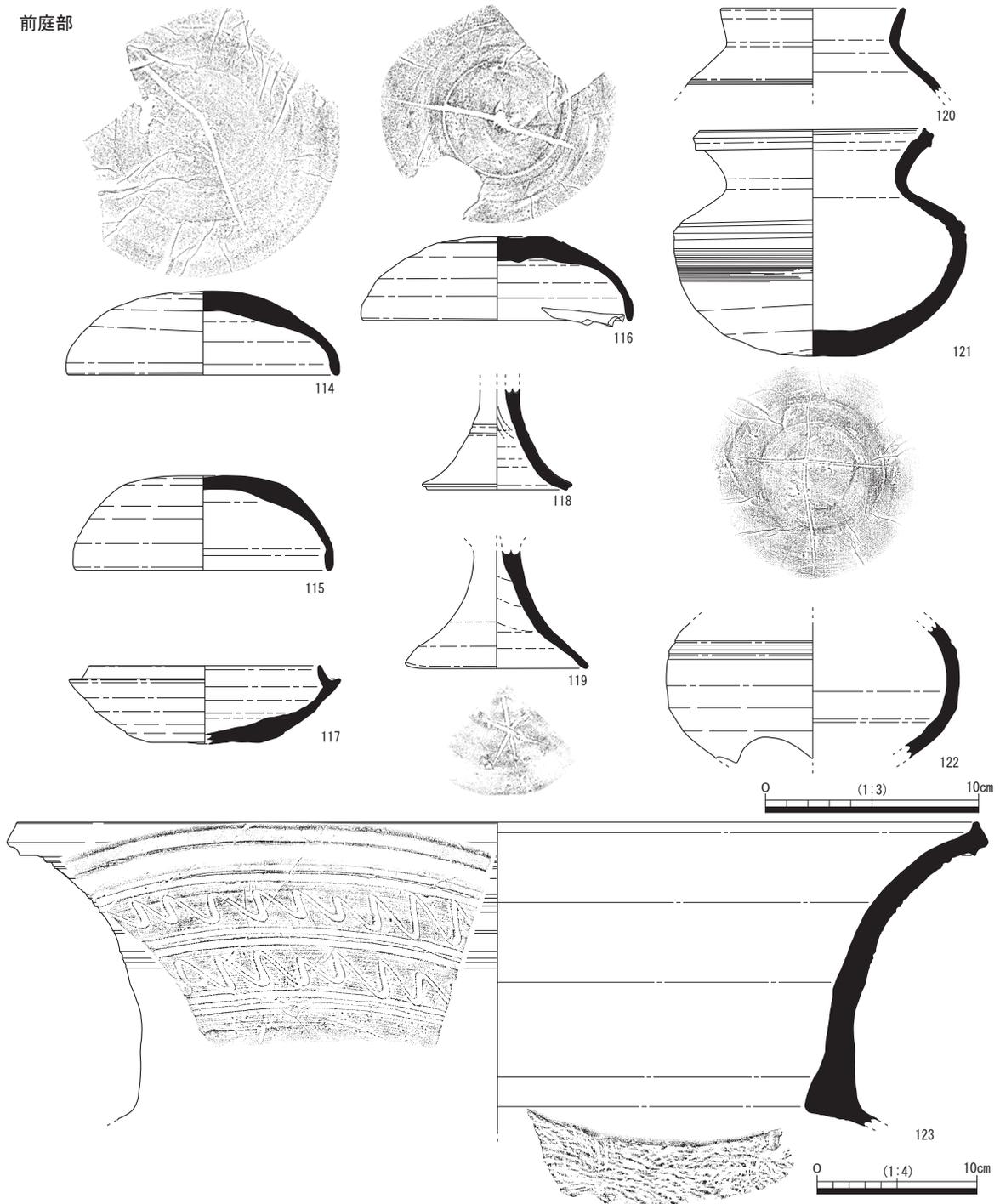
**須恵器(124～133)** 124・125は杯H蓋で、いずれも外面にヘラ記号を有する。天井部は124が回転ヘラケズリ、125が手持ちヘラケズリである。125は口縁端部内面に面を有し、天井部内面に指頭痕が残る。126・127は杯H身で、いずれも外面にヘラ記号を有し、底部は回転ヘラケズリである。立ち上がりは直立気味に短く立ち上がる。128・129は短脚高杯の杯部で、口縁部は外方へ直線的にのびる。128・129ともに杯部下半に沈線が巡り、129は底面にカキメを施す。130・131は椀である。130は平底の底部を手持ちヘラケズリで調整し、底部外面にヘラ記号を有する。131は口径14.0cmで、口縁部は直立して立ち上がり、下半に2条の突線が巡る。高台がつくものかもしれない。132は平瓶で、外面は底部付近のみ回転ヘラケズリ、他はカキメである。133はすり鉢(陶臼)で底部を欠く。



第18図 1号窯跡出土遺物実測図② (1/3)

体部は直線的に外方に開き、口縁端部は肥厚する。底部は外側に張り出すものであろう。外面に2条2単位の沈線が巡り、外面の全面にカキメを施す。

前庭部



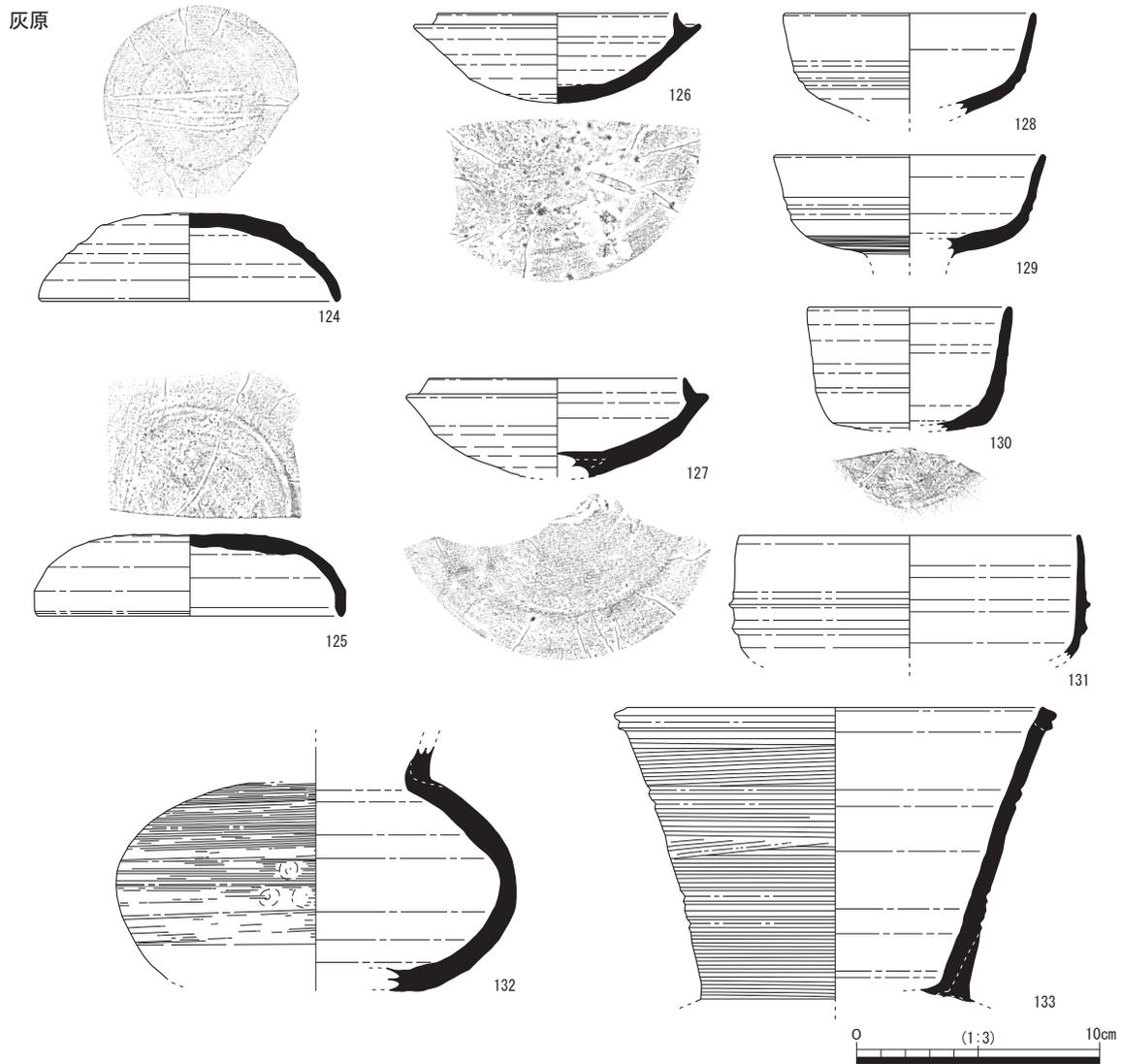
第19図 1号窯跡出土遺物実測図③ (1/3・1/4)

【溝 (第21図)】

須恵器 (134) 杯H蓋で、天井部に回転ヘラケズリを施す。

【トレンチ (第21図)】

須恵器 (135～145) 135・136は杯H蓋である。いずれも天井部は回転ヘラケズリ、外面にヘラ記号を有する。137～139は杯H身で、いずれも底部は回転ヘラケズリである。139は外面にヘラ記号を有する。140～142は高杯の脚部で、140・141は短脚、142は長脚である。140は内面にヘラ記号を有し、141は外面に2条の沈線を有する。142は外面にカキメを施す。143は平瓶で、肩部



第20図 1号窯跡出土遺物実測図④ (1/3)

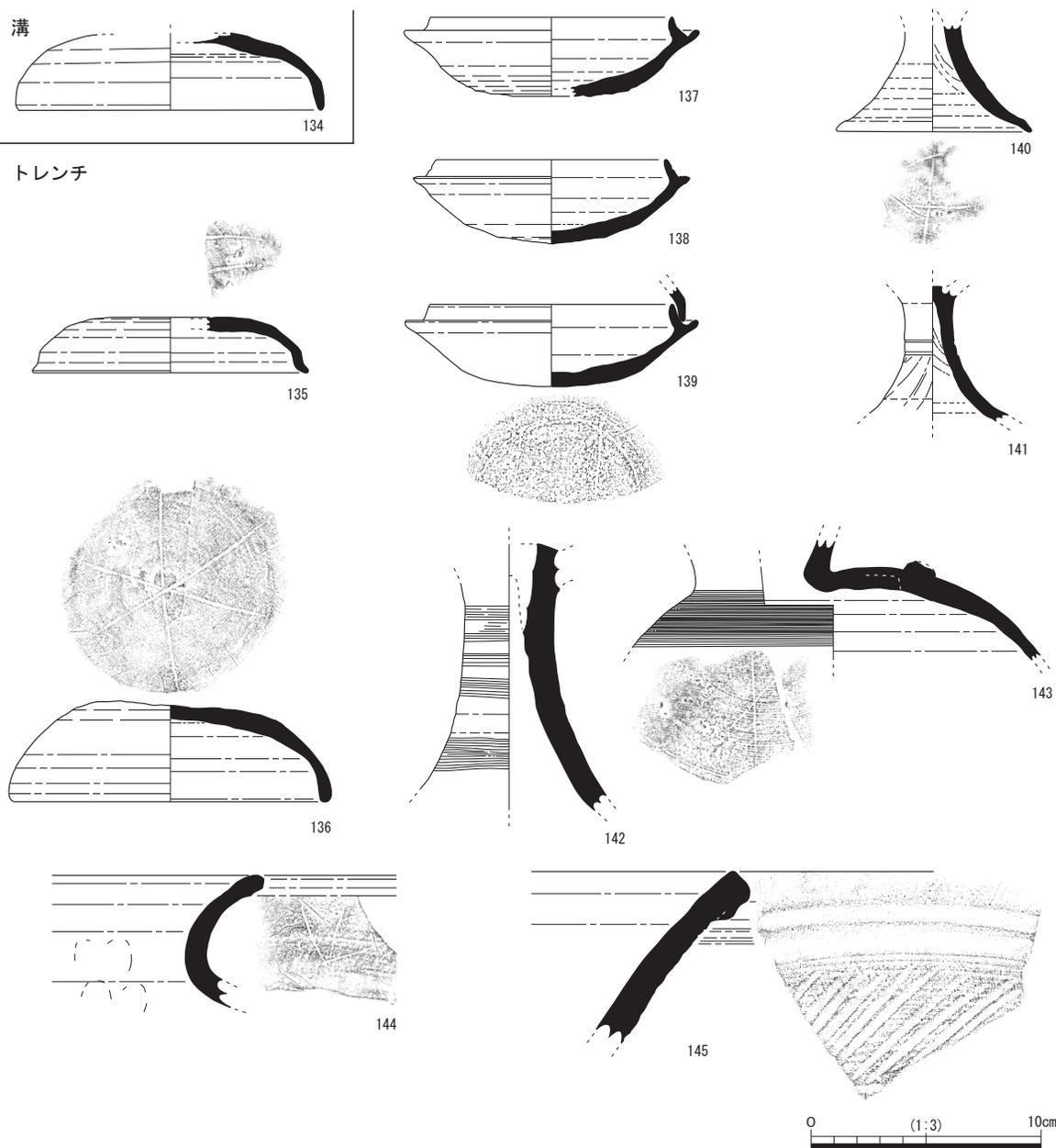
に瘤状の粘土塊を貼り付ける。外面はカキメ、ヘラ記号を有する。144・145は甕の口頸部片である。144は口縁部が湾曲し、外面にヘラ記号を有する。145は口縁部が直線的に立ち上がり、口縁端部は肥厚する。外面に斜線文を施す。

### 【その他 (第22図)】

**須恵器(146～150)** 146は杯H蓋で、天井部は回転ヘラケズリで丸みを帯びる。147は器高が高く、椀とした。底部は回転ヘラケズリ、底部内面に指頭痕が残る。外面にヘラ記号を有する。148～150は甕である。148は口頸部が若干湾曲して立ち上がり、口縁端部は肥厚する。外面に連続斜線文を施す。149は口縁部が直線的で、口縁端部は肥厚する。外面に連続斜線文を施す。150は体部片で、傾きは不明である。外面に擬格子タタキ、内面には同心円当具痕が残る。

### (3) 小結

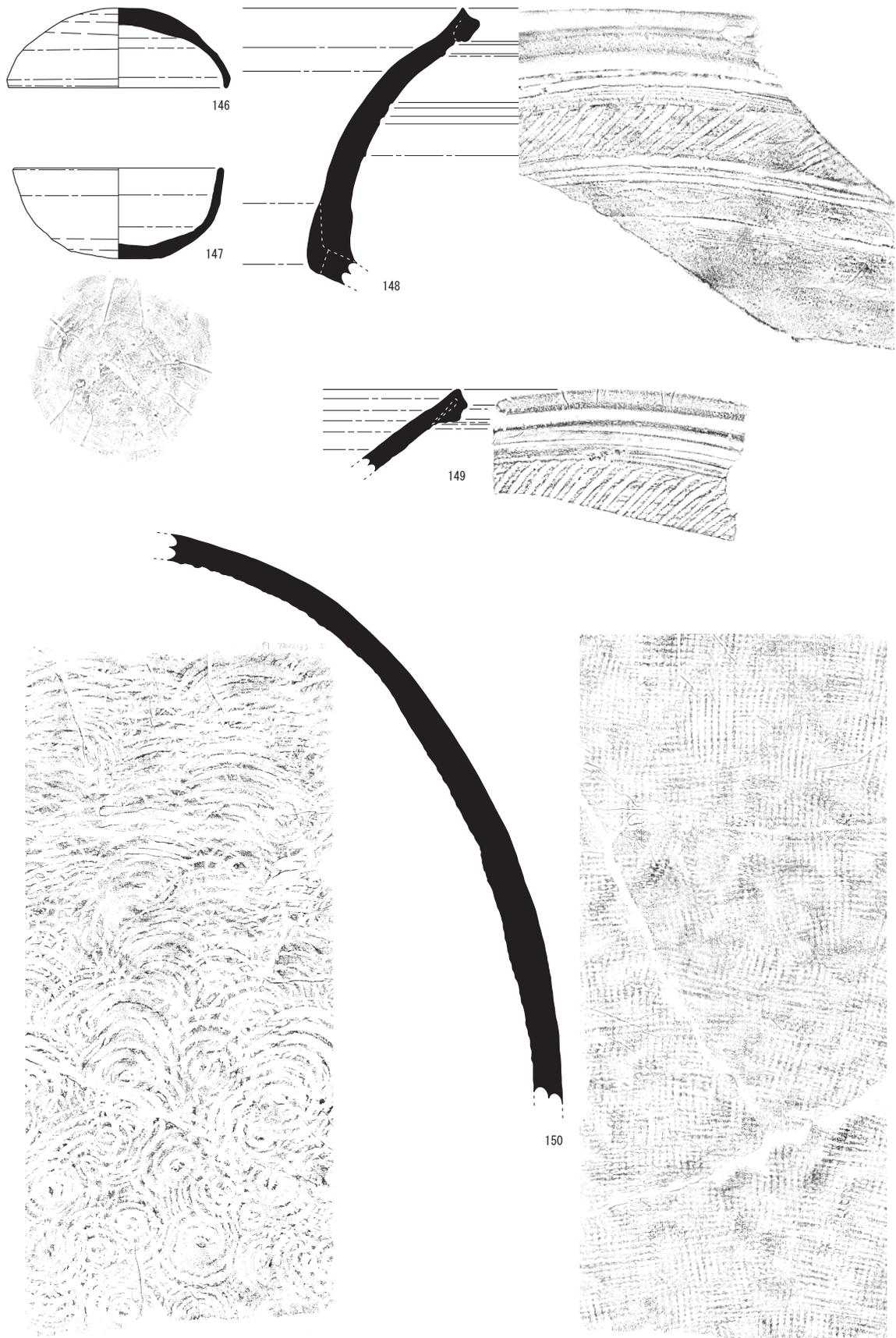
1号窯は全長8.9mの地下式窖窯である。平面寸胴形で、複数の排煙口を有する多孔式煙道窯である。焼成部および煙道部の一部に天井部を確認した。操業時期は出土遺物よりIV A期に位置づけられ、蓋杯類の口径が小さいことや天井部・底部に丸み強いこと、杯身の立ち上がりが低く内傾



第 21 図 1 号窯跡出土遺物実測図⑤ (1/3)

するものが主体であることや短脚高杯を含むことから、IV A 期でも IV B 期に近い段階と考えられる。蓋杯類は天井部・底部内面に指頭痕が残り丸みを帯びるものが多く、当該窯で生産した須恵器の特徴の一つである。

その他



第22図 1号窯跡出土遺物実測図⑥ (1/3)

### 3. 2号窯跡

#### (1) 窯の構造 (第23図、図版5・9～14)

地下式窖窯である。前庭部を欠くが燃焼部から窯尻部までの14mを検出した。燃焼部・窯尻部の絞り込みはなく、平面寸胴形を呈し、全長8.6mである。煙道部は一部天井部が遺存し、複数の排煙口を有する多孔式煙道窯である。燃焼部付近の天井も遺存していたようであるが、明確な範囲は不明である。窯の主軸方位はN-92° -Eである。図面で判断する限り、作業面は2面あると考えられる。

**【焚口部・燃焼部】** 焚口部の明確な範囲は不明である。燃焼部の幅は焼成部側で2.1mほどで、前庭部側に向かってやや開き気味となる。当初作業面の床面には長さ2.5m、幅1.0m、深さ0.3mの舟底状ピットがある。さらに、前庭部側には一辺1.5m、深さ0.3mほどの隅丸方形の土坑がある。焼成部の右壁には壁体に埋め込まれるように、長さ1.5m、高さ0.5mの範囲で石組を行い、スサ入り粘土塊で石の間を充填する。石組下端が最終作業時の床面と同一であることから、窯体の補修に伴うものと考えられる。燃焼部からは須恵器の甕片などが出土した。

**【焼成部】** 長さ約7.0m、最大幅は2.0mである。床面の傾斜角度は、焼成部中央付近までは26度、焼成部上部から煙道部側にかけては35度となる。急傾斜になる煙道部側の床面には4段の段を有し、それぞれの段の幅は0.1～0.2mほどである。床面からは焼き台として使用した甕の破片や置き台が散在して分布する。遺物は須恵器蓋杯や甕片などが出土した。なお、図示はされていないが、写真には「2号窯鉄鏝出土状況」という注記付きで鉄鏝の出土状況が記録されている。詳細な位置は不明であるが、床面の傾斜状況から焼成部の床面で出土した可能性がある。鉄鏝そのものは行方不明であるが、整理の過程で東浦2号窯の遺物とともに小型ケースに納められた人骨を確認している。焼骨の可能性はある。

**【煙道部】** 3つの排煙口が横一列に並ぶ多孔式煙道で、天井部が遺存し、奥壁までの水平長さは約1.7mである。地山を掘り抜いたものか、粘土などで構築したものかは不明である。各排煙口の直径は0.7～0.8m程度である。左側の1孔は窯体上部方向へ貫通し、他の2孔は溝へと接続する。

**【溝】** 煙道部の右側に溝が接続し、弧状にのびる。断面逆台形を呈し、溝中央付近で上端幅1.5m、下端幅0.7mである。遺物は須恵器杯H蓋・高杯が出土した。

**【灰原】** 縦断土層図によると、3～4mの範囲で黒色土の灰原の広がりを確認できる。詳細は不明であるが、遺物は須恵器蓋杯・高杯・平瓶・すり鉢などが出土した。

このほか、出土地点不明遺物として、須恵器蓋杯・甕などがある。

#### (2) 出土遺物

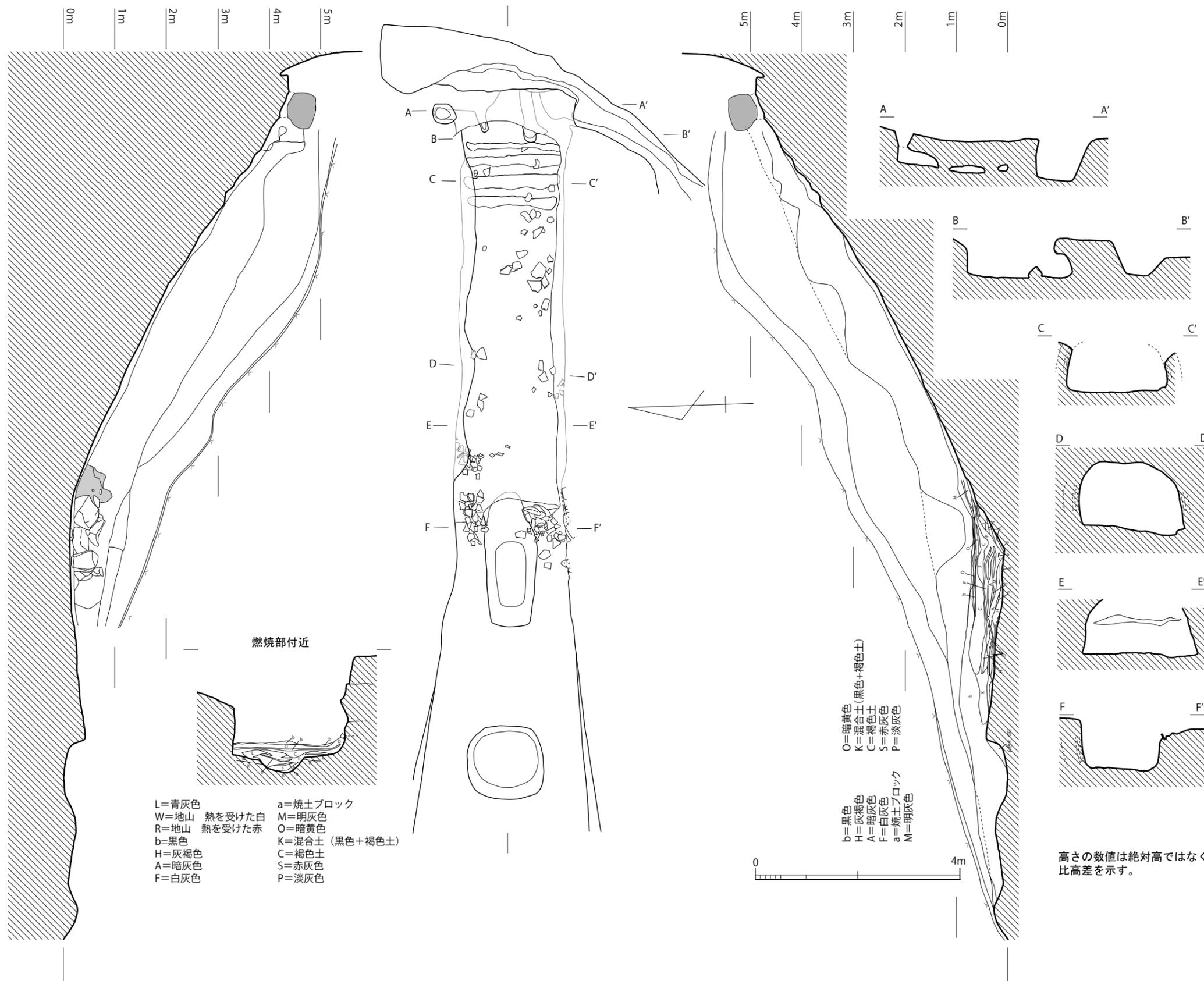
##### 【焼成部 (第24図)】

**須恵器 (151)** 杯H蓋である。天井部は回転ヘラケズリで、外面にヘラ記号を有し、内面に指頭痕が残る。

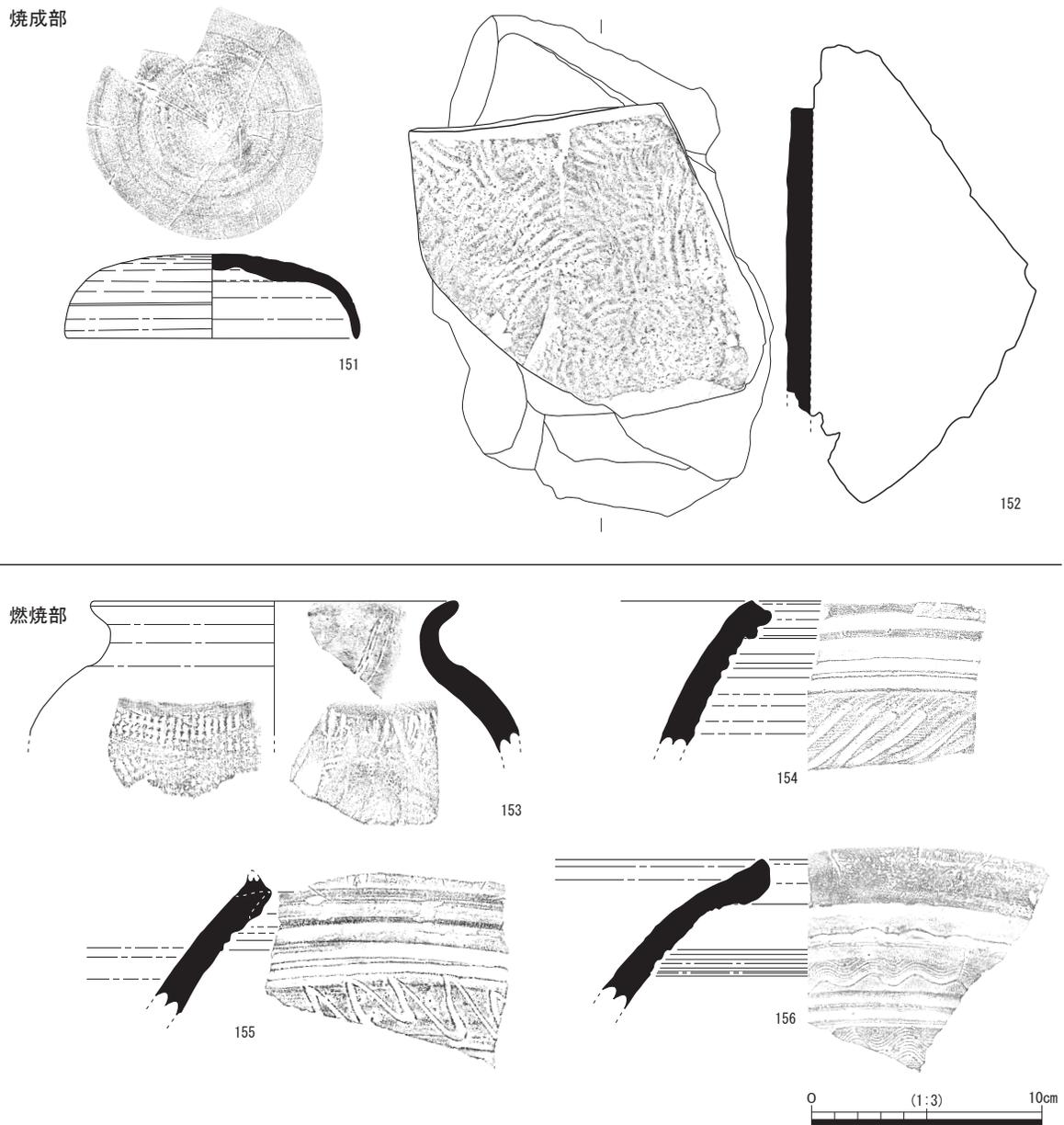
**焼き台 (152)** 花崗岩の礫を焼き台に使用したもので、甕の体部片が付着する。

##### 【燃焼部 (第24図)】

**須恵器 (153～156)** 153は小型の甕で、外面は擬格子タタキ、内面は同心円状の当具痕が残る。



第 23 図 東浦窯跡群 2 号窯跡実測図 (1/80)



第24図 2号窯跡出土遺物実測図① (1/3)

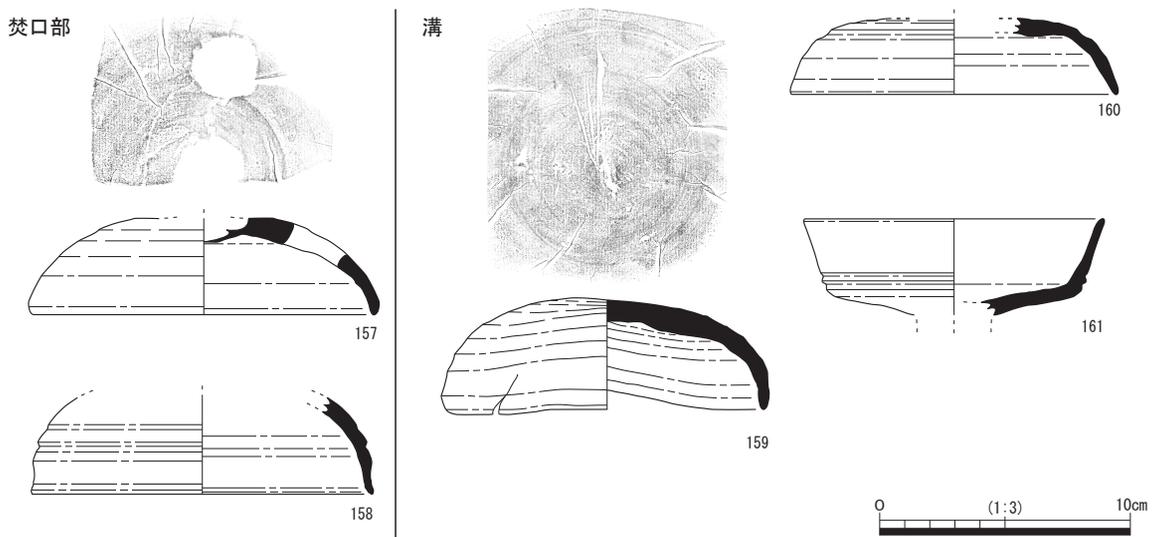
154～156は甕の口縁部片である。154は口縁端部が口唇状を呈し、外面に連続斜線文を施す。155は口縁端部が肥厚し、外面にへら描き波状文を施す。156は口縁端部が玉縁状を呈し、外面に櫛描波状文を施す。

#### 【焚口部 (第25図)】

**須恵器 (157・158)** 157・158は杯H蓋である。157は外面は回転へらケズリで、へら記号を有する。天井部には焼成前穿孔がある。158は天井部と口縁部の境に沈線が巡り、口縁端部は面を成す。天井部は回転へらケズリである。

#### 【溝 (第25図)】

**須恵器 (159～161)** 159・160は杯H蓋で、いずれも外面は回転へらケズリである。天井部内面に指頭痕が残る。161は無蓋高杯の杯部である。下半に2条の沈線が巡る。



第25図 2号窯跡出土遺物実測図② (1/3)

## 【その他 (第26図)】

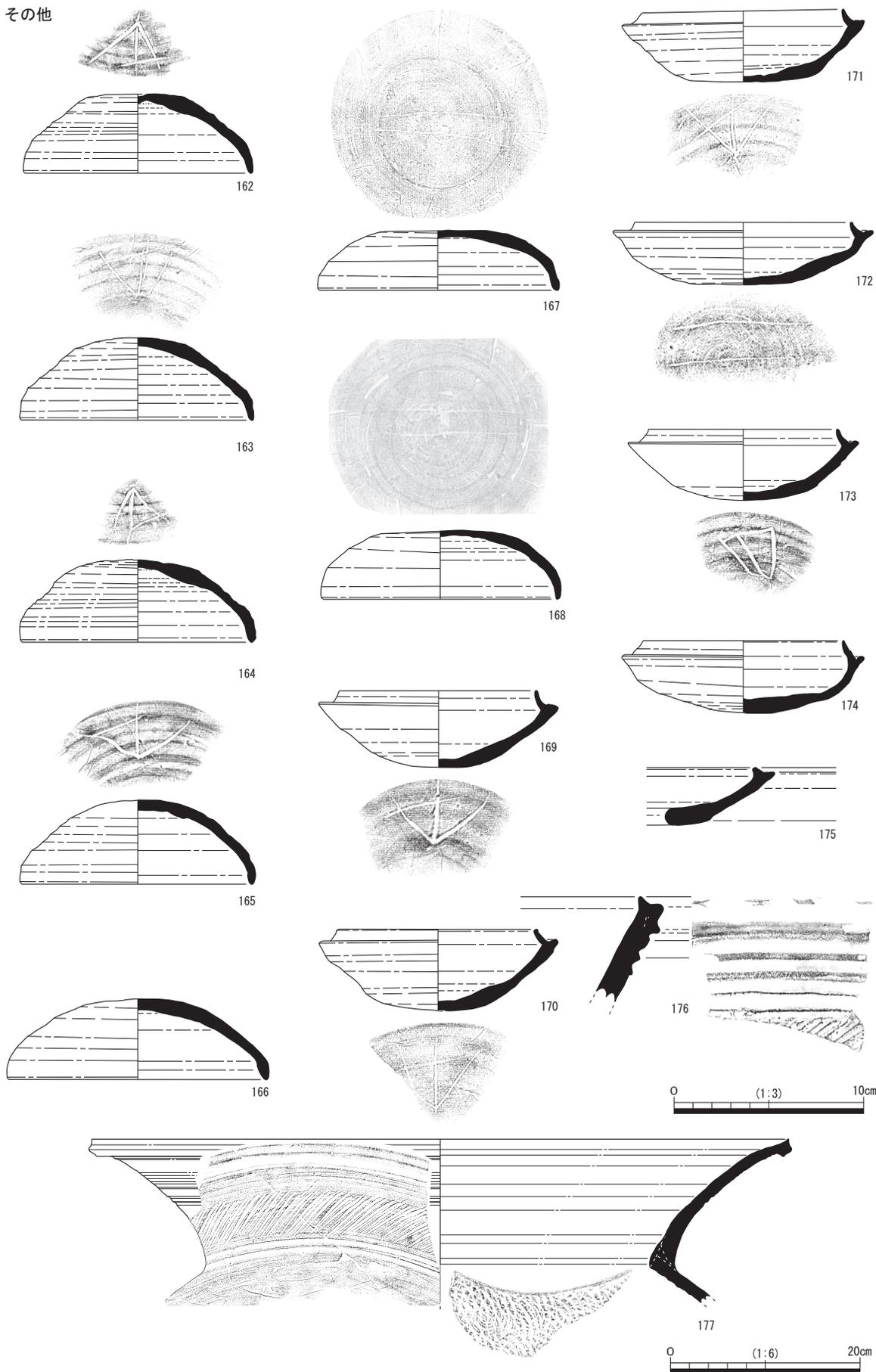
**須恵器 (162～177)** 162～168は杯H蓋で、166は13.8cm、他は12cm台である。いずれも天井部は回転ヘラケズリで、166以外は外面にヘラ記号を有する。いずれも指オサエにより天井部を丸く仕上げる点が共通する。特に、162～165は回転ナデの単位が細かく、外面に明瞭にロクロ目が残ることが共通し、ヘラ記号は同じ記号である。169～175は杯H身で、口径は9.9～11.2cmである。いずれも底部は回転ヘラケズリで、内面に指頭痕が残る。169～173はヘラ記号を有し、169～171は162～165と、172は167・168と同様の記号で、指オサエにより丸みを帯びた器形とする点も共通し、セット関係の可能性がある。175は底部中央に焼成前穿孔があり、窯道具の可能性もある。176・177は甕である。176は口縁部の細片で、口縁直下に沈線が巡り、その下に連続斜線文を施す。177は大甕で、外面に平行タタキ、内面には同心円当具痕が残る。口縁端部は肥厚し、断面は方形を呈する。口縁直下と頸部中位に2条1単位の沈線が巡り、その間に連続斜線文を施す。

## (3) 小結

2号窯は全長8.6mの地下式窖窯である。平面寸胴形で、複数の排煙口を有する多孔式煙道窯である。焼成部および煙道部の一部に天井部を確認した。操業時期は出土遺物よりIV A期に位置づけられる。一部、古い様相を持つものもあるが、2号窯に伴うものかどうかは不明である。

なお、焼成部の床面からは鉄鏟が出土しており、焼骨も確認できることから、操業停止後に墳墓として利用した可能性がある。

その他



第26図 2号窯跡出土遺物実測図③ (1/3・1/6)

## 4. 3号窯跡

### (1) 窯の構造 (第27図、図版5・15～19)

地下式窖窯である。燃焼部から窯尻部までの13mを検出した。燃焼部・窯尻部の絞り込みはなく、平面寸胴形を呈し、全長9.5mである。煙道部は不明確な点が多いが、複数の排煙口を有する多孔式煙道窯の可能性があり、煙道部から右側に溝が接続する。窯の主軸方位はN-36°-Eである。操業面の明確な数は不明であるが、焚口部付近の横断土層と考えられる図面には、「床」の注記がある面が3面もしくは4面あり、複数の操業面があった可能性がある。

**【焚口部・燃焼部】** 焚口部の明確な範囲は不明である。燃焼部の幅は2.5mほどで、前庭部側に向かってやや開き気味となる。燃焼部の壁際には、直径0.2mの円筒状を呈するスサ入り粘土塊が確認された。左側の粘土塊は立った状態で、粘土塊の中央に直径5cmほどの空隙がある。右側の粘土塊は図示された範囲で少なくとも1mの長さがあり、窯内部側へと倒れた状態であった。天井を支えた支柱と考えられ、棒状の有機物にスサ入り粘土を貼り付けて構築したと想定される。焚口部・燃焼部として取り上げられた遺物は、須恵器蓋杯・高杯・椀がある。

**【焼成部】** 長さ約9.0m、幅は燃焼部側で2.5m、煙道部側で2.0mあり、奥壁に向かってややすぼまる。床面の傾斜角度は、焼成部中央付近までは22度、焼成部上部から煙道部側は35度となる。急傾斜になる煙道部側の床面には6～7段の段を有し、それぞれの段の幅は0.1～0.2mほどである。床面からは焼き台や置き台が散在して分布する。遺物は須恵器蓋杯・高杯や甕などが出土した。なお、燃焼部付近から焼成部中央部にかけて未焼成の甕が複数個体出土した。少なくとも左壁側で3個体、右壁側で1個体あり、いずれも当初操業面と考えられる床面のレベルから0.3～0.5mほど浮いた状態である。他に未焼成の土器がないことから、窯詰め後に天井が崩落して残された可能性は低い。写真には「素地、この窯(廃窯後)を物置としたと考えられる」と解釈している。

**【煙道部】** 詳細は不明であるが、1・2号窯との関係や溝が接続することから、多孔式煙道であった可能性が高い。煙道部左側で底部穿孔した完形品の杯H身が出土した。

**【溝】** 煙道部の右側に溝が接続し、直線的にのびる。断面逆台形で、煙道部との接続部付近で上端幅0.5m、下端幅0.3mである。出土遺物はない。

### (2) 出土遺物

#### 【焼成部 (第28図)】

**須恵器 (178～181)** 178は無蓋高杯の杯部で、外面に沈線・カキメを施す。179は甕で、体部上半はカキメ、中位に楯状工具により刺突文を施し、下半はヘラケズリである。180は杯H蓋もしくは身で、焼成前穿孔を施す。181は甕で、外面は擬格子タタキ、内面には同心円当具痕が残る。

#### 【燃焼部 (第28図)】

**須恵器 (182～185)** 182～184は杯H蓋である。いずれも天井部は回転ヘラケズリで、外面にヘラ記号を有する。184は内面に指頭痕が残る。185は有蓋高杯で、脚裾部を欠く。脚中位に沈線が巡り、カキメを施す。杯部は顕著に歪み、重ね焼きにより別個体が付着する。

#### 【焚口部 (第28図)】

**須恵器 (186～193)** 186～188は杯H蓋である。いずれも天井部は回転ヘラケズリで、186・